

無能力者は挫けない

本間 快都

プロローグ

『異能力戦争』過去、日本とアメリカの間で起きたとても長く、血で血を洗う凄惨(ルビ・せいさん)な戦争である。

この世界には、己(ルビ・おのれ)の身に超常的な力『異能力』を宿した『異能力者』が存在する。日本には特に多くみられ、能力によって首都東京を中心に中枢機能・都市機能に革命をもたらした。それに目をつけたアメリカが戦いを仕掛け起こったのが異能力戦争だ。

この戦争で日本は敗北。革命をもたらしたはずの各機能は壊滅。更に能力者の大多数が戦死、奪取(ルビ・だっしゅ)された。戦勝国であるアメリカからの軍事干渉や管理など、今の日本にも影響するほどの損害を余儀なくされた。

そして時は十年経つ。日本は戦後、復興し徐々に元の姿を取り戻しつつあった。壊滅した東京は本拠地を神奈川県に移動。名を「新東京」に改めた。だが日本を悩ませる種は増幅していく。

これは、異能力が蔓延(ルビ・はびこ)る世界で己(ルビ・おの)が目的を果たすために奔走(ルビ・ほんそう)する者たちの物語である。

一 別れ

図書室。沢山の本に囲まれた静寂な空間だ。地方にある小さな学校。その二階に位置するこの教室内には、夕陽の光がとめどなく射し込んでいた。時刻が夕方ということもあり、図書室はおろか、校舎内にはほとんど人がいない。図書室には一人だけ、机に突っ伏して眠っている男子生徒の姿があった。男子生徒の周りにはたくさんの本が無造作に置いてある。それに囲まれながら眠る男子生徒の気持ちよさそうな寝息が響く図書室だが、扉が開く。

「ふんふくん……おっと」
中に入ってきたのは女子生徒。茶色のポニーテールを靡(ルビ・なび)かせ、鼻歌を交えながら図書室に入る。眠っている男子生徒に気が付くと、ゆっくりと近づいていく。

「……寝てるし」
顔を覗き込むと、気持ちよさそうに眠る顔。それを見た女子生徒はニッと笑うと男子生徒の耳元に顔を近づける。そのまますうっと息を吸い込むと口を開いた。

「起きろー!!」
「……うわあっ!」

急な大声が図書室中に、学校中に響き渡った。男子生徒は耳元での大声にさぞ驚いた様子で、身体を大きく震わせて立ち上がった。

「おはよ、或」

辺りを見回して何が起きたのか確認する少年、鈴原或(ルビ・ずずはらある)は彼女を見ると

「……なんだ零奈(ルビ・れいな)か……大声出すなよ……」

と肩を落とす。彼女、桐谷(ルビ・きりたに)零奈はしてやっつたりの嬉しそうな表情を見せる。

「なんだって何よー。折角幼馴染の超絶美少女が起こしに来てあげたっていうのに！」

自慢のポニーテールを揺らしながら零奈は笑いかける。

「超絶美少女は自分のことを超絶美少女とは言わねえよ。それに起こしてくれなんて頼んだ覚えはないぞ」

ありがた迷惑だ、と言わんばかりの皮肉。だがそれも零奈には効かない。

「だから気を利かせて来たんだよー。それにほら、学校も閉まる時間だし」

時計の針は午後六時を指していた。この学校は六時半になると生徒の下校完了時間で校内が閉まるのだ。

「……あー、もうそんな時間か。片付けよ」

「手伝うよ。或は何の本を読んでいたのかなー？」

或が辺りの本を手に取り元あった場所に返そうと纏めている傍ら、零奈は本を一冊手に取るとバラバラとめくりだす。

「なになに、『異能力について』『異能街(ルビ・いのうがい)の実態』……異能力に関する本ばかりだね。或は無能力者じゃん？」

この世界には、己の身に人智を超えた『異能力』を宿した『異能力者』が数多く存在する。いつから、どのようにして生まれてきたのかは誰もわからない。ただ異能力者は、呼吸をするように、手足を動かすように異能力を扱うことができる。また、そんな能力者が日本に**数多(ルビ・あまた)存在しているのが今の日本の現状だ。**

「はつきり言ってくれるな。別に俺が何を讀んでいようが勝手だろ」

世の中は異能力者ともうひとつ、『無能力者』が存在する。名の通り異能力を持たない、極普通の人間だ。或はこの無能力者に分類される。

「異能力に興味あるの？ あっ、もしかして能力者の私に嫉妬しちゃった？」

ドヤ顔で或を見る零奈。もはや見慣れたものなのか、或は一瞬目を合わせただけでスルーを決め込む。無能力者の或に対し、零奈は異能力者だ。

この日本で、異能力を発現させると収容施設『異能街』に収容される。

異能街は、**荒廃(ルビ・こうはい)**した旧東京を更地にして作った街だ。過去の戦争で戦勝国であるアメリカとの共同管理の下で成り立っている。

異能力を発現すると異能街へ招集するための通達が来る。準備期間を一ヵ月とし、以内に

東京に行かなければいけない。そして、零奈はその通達を受け絶賛準備期間の真っ最中だった。

「無いと言えば嘘だけど、零奈に嫉妬することはないな」

「それは残念だねー。ま、異能力者になってもいいことなんてないけどね」

口を動かしながらも手元の本を一冊ずつ本棚に戻していく。

「それは考え方次第だな。よし、本も全部戻したし、帰ろうぜ」

「うん！　っていうか、そのために来たのにどっかの誰かさんが寝てるから遅くなったんだけど」

「はいはい、帰るぞ」

「もー……自分勝手なんだから」

或は鞆を持ち図書室を出る。口では不満を漏らしつつも、少し笑って後をついていく。二人は共に図書室を出た。

外に出ると、夕日の光が辺り一面を照らしていた。通り抜ける風、聞こえる虫の音。身にも心にも沁(ルビ・し)みるようなこの情景を、二人は生まれ育ったこの町でずっと見てきた。

「私が異能街に行ったら……ひとまずお別れになっちゃうね。実感ないなあ……」

「同感だ。お前がいなくなったら誰も俺を起こしてくれないだろうからな」

「いつも寝起きが悪いの、何度言っても治らなかつたもんね」

或と零奈は旧知の仲、幼馴染だ。それも物心ついた時には一緒に居て家族ぐるみの付き合いもある。幼馴染以上家族未満の中々見ない関係だ。地方で町も小さな分、学校もずっと一緒に、寧(ルビ・むし)ろ居ないことの方が珍しいと思える仲だ。だからこそ別れを惜しむ気持ちはお互い人一倍に強い。

「んでも、異能街ってどうなんだろうな。俺は何も知らないけど大変なんだろう？」

「噂だよね。実際行ってみないとわからないっていうのもあるけど……。それに、あそこでお父さんとお母さんは死んじゃった。何か、わかるかもしれない」

「お前……」

零奈の両親は、零奈の幼少期に死去している。元々零奈の両親は能力者で、十年前に起きた『異能力戦争』の生き残りだ。その後零奈を祖父母の家に預け異能街に行ってしまった。だが、異能街に移住して数日後、異能街を管理する日本政府の中央区により、『事故で亡くなった』と一報が入った。異能街に行く直前、両親に異変を感じていた零奈は「両親の死には裏があるはず」と過去、或に話したことがあった。

異能街は、荒廃した旧東京を更地にして作った街だ。過去の戦争で戦勝国であるアメリカとの共同管理の下で成り立っている。噂ではアメリカの陰謀も絡んでいるとの話も出ているが真意は定かではない。

「……なんてね。さ、帰る帰る」

曇った表情を払拭(ルビ・ふっしょく)し前を向く。だが目の奥にはどこか遠くを見ているような、寂しい感情が残っている。

「……お前、まさか」

何かを察したように或は小さい声で呟く。だが呟いた声は零奈に届かない。いや、届いているのかもしれない。だが零奈はその言葉に反応する事は無く、そのまま歩みを進めた。或もその後ろに続く。

「……或はさ」

歩いている途中、ふと零奈が声をかける。

「この世界をどう思う？」

零奈から発せられた言葉は、とても難しい問いかけだった。

「どうって言われてもなあ。なんだよ急に」

「世界には異能力者と無能力者がいて、溝があるじゃん？」

「……ああ」

今の日本を悩ませている問題の一つ。それが異能力者と無能力者の差別問題だ。元より異能力という不平等なものがあり、あまり友好的ではなかった。そしてそのまま戦争起きてしまう。アメリカの狙いは中枢機能や都市機能を潤した能力者だった。無能力者は「勝手に狙われて戦争が起き、生活を脅かされた」と捉えてしまう。それによって双方の間には深い溝が出来た。異能街が出来た時も、無能力者たちからの反対の言葉は出なかった。

「ま、俺はあからさま差別されてる所なんて見たことねえし……。能力者と無能力者は仲良くできないって風潮あるけど、実際俺たちはこうして仲良いだろ」

二人は古くからの付き合い。だからこそお互いが能力者か無能力者なんて関係なく接することが出来ている。

「私たちはね。だけど大半の無能力者は能力者を嫌ってる。異能力というものを危険視するのはアメリカだけじゃないんだよね」

「無能力者がそうだってことか？」

或が聞き返すと、零奈は思いつくように遠くを見つめながら言う。

「……この間、新東京に行った時に見ちゃったんだ。異能街に繋がる関門でデモを起こしている人たち。他にも歩けば能力者の悪口は聞こえるし、挙句の果てには演説してる人までいたんだ」

「それだけでどうにかなる問題でもないだろうけどな」

「まあね。政界の人たちだってそれで動くとは限らない。だけど、さ。……やっぱり能力者って煙(ルビ・けむ)たがられてるんだって思っちゃったんだ」

寂しそうな表情をする零奈。その目は悲哀と共に憤怒の意が混同していた。

幾(ルビ・いく)ら二人の関係が良かろうと周りとは、世間とはそういうものだ。その現状を目の当たりにしてしまった零奈。自分が能力者であることが間違っているかのように思えてしまうのも無理はない。

「俺は正直、溝とかいざこざなんてわかんねえよ。けど、お前なら上手いことやれるんじゃないの？」

零奈は学校限らずこの町では名が知れ渡るほどの有名人だ。容姿端麗で誰とでも隔てなく話せる。それだけ学校で人気が出ていううえ、近所の畑仕事だったり町に住んでる人々の手助けまでしている。誰からも羨望(ルビ・せんぼう)され、好かれる零奈をずっと隣で見えてきたからこそ、或は今の言葉を投げかけた。だが、その言葉が引き金を引いてしまうことになる。

「……無能力者の或にはわからないよ。誰かもわからない人から非難されて、居場所も限られてる私たちのことなんて」

一見すると皮肉にしか聞こえないが、現実を目の当たりにした零奈にそんなつもりはない。だが、或は目を鋭くして零奈を見た。

「……なんだよそれ」

「……あっ」

ここで零奈は失言に気が付く。受け取り手からすれば明らかに能力者と無能力者を差別する言葉だ。

「能力者様は俺とは違うってか？ 言っとくけど、零奈や他の能力持った奴らが悩んでいるように俺だって悩みはあるんだからな」

売り言葉に買い言葉。真意は他にあると気が付いていても、突き放されたようなその言葉に反応してしまった。

或自身、自分が無能力者であることに悩み苦悩してきた。それも隣を歩く幼馴染が能力者となれば比べられることもあったが、それはあくまで他人の意見だ。そんな周りの意見も気にせず零奈はいつも或に接していた。だが零奈本人から言われたとなれば話は別だ。

「ち、違う！ そういう意味で言ったんじゃない……」

零奈は慌てて撤回しようとするも、聞く素振りすら見せない或。零奈の後ろを歩いていた或だが、零奈を抜かし一人で前に進む。

「お前だけは……信じてたのによ」

「ちょっと待ってよ！」

零奈の呼び止める声にも振り向かず、或はただ進み続ける。零奈は後を追うことはできずただ背中を見つめることしかできなかった。

「……或……」

零奈は目尻に涙を浮かべながら名前を呟いた。

これまでも何度か二人の間で喧嘩や衝突はあった。だがそれは些細なもの。今回に関しては能力者と無能力者という世間でもある溝が絡んでいるからこそ、簡単に解決はしないものだ。

やがて或の姿は見えなくなってしまい、見慣れた通学路だけが眼前に広がる。いつも二人で歩いてきた道だが、一人となると物悲しい。零奈は一人で帰路(ルビ・きろ)についた。

夕日が、流れる涙を照らす。その涙は、とめどなく零奈の頬を伝っていた。

「……はあ、何であんなこと言っちゃまったんだ……」

自宅のソファに寝転がりながら或は後悔を口にした。何気ない言葉だったがついカッとなってしまう反論してしまった。落ち着いて考えみれば零奈が突き放すような意味で言った訳じゃないことくらいわかる。頭に血が上った状態だったとは言え、そんなこともわからなかったのかと帰宅してから溜め息ばかりだ。

「……まあ、そのうち解決すんだろ」

いつもは日が経てばどちらかが謝り解決する。今回も同じだろうと考えていた或だが、ひとつだけ懸念点があった。

「……新東京」

零奈の新東京行きだ。零奈は早いうちにこの町を出て行ってしまおう。その前に謝らなければ、とは考えていた。だが

「能力者がそんなに偉いのかよ」

突き放されたことによる怒りと、自分の小さなプライドが邪魔をして謝ることを阻(ルビ・はば)む。

「……ふあ〜」

ソファの上で大きな欠伸(ルビ・あくび)をひとつ。次第に瞼(ルビ・まぶた)が落ちてくる。

(まあ、明日になりゃどうにかなるだろ)

そう思い或は夢の世界に入った。

翌日。現状は変わっていないかった。いつも零奈が朝起こしに来て一緒に学校に行く流れなのだが、家にすら来なかった。最初は喧嘩したせいで会いにくいのかと思っていたが学校について更に距離が離れていることに気が付いた。授業中、休憩時間、放課後まで声をかけることは愚か目すら合わなかった。周りもその異変に気が付いたらしく、友人が訪ねて来たり冷やかしに来たりする人もいた。

結局何もできずその日は帰宅。気にはしつつも時間が解決してくれるだろうと悠長に見ていた或だが、更に翌日以降から焦りだすこととなる。

「……来ない」

いよいよ零奈は学校にも来なくなってしまった。引越し等で行けなくなる日があるとは聞いていたものの、まさか喧嘩別れになってしまうのでは、と気持ちを急(ルビ・せ)かす。

結局その日から零奈が学校に来ることは無かった。周りも零奈が引越すことを知っているためかあまり気にする者はいない。

「……まだこっちにいんのかな」

一度零奈の家に行ってみるか、と或は考えた。まだいるならば、今のうちに謝っておきたい。この前まで意地を張って自分から謝ることはしないと思っていたが、やはり喧嘩別れになるのは或も望んでいない。学校終わりに行く覚悟を決め、その日の学校生活を過ごした。

結局授業には身が入らず、どう謝るのかを頭の中でシミュレーションするだけだった。学校が終わり、そのまま零奈の家に直行する。

零奈の家に着き、インターホンを鳴らす。するとインターホン越しに聞きなれた零奈の祖母の声が届いた。

「あ、鈴原です」

名乗ると返答の前に扉が開いた。そこには零奈の祖母の姿が。

「どうも」

「いらっしやい、或君。どうぞ上がって」

「いえ、ここで大丈夫です」

零奈がいるかどうか、いなかったらいつ戻ってくるのかを聞くだけだ。

「あの……今零奈はいますか？ 最近学校にも来てないみたいで」

すると零奈の祖母は少し驚いた顔をした。

「あら、あの子或君に何も言っていなかったの？」

「……ええ、まあ」

祖母の反応を見るに喧嘩したことを言っていないのだろう。「言わなかった」というより

「言えなかった」のほうが正しいだろうか。

「あの子、もう東京への引越越し終えたのよ。だからこっちはもう戻って来ないの」

「……え？」

間に合わなかった。その言葉が脳裏を駆け抜けた。何とかなると思っていたあの頃に行動しておけばと後悔も同時に襲ってくる。

「そ、そうですか……」

「ごめんねえ。てっきりあの子のことだから或君には伝えたと思って……」

「とりあえず連絡とってみます。急にすいませんでした」

或は一礼して帰ろうとする。

「あ、或君」

が、祖母に呼び止められた。振り向くと急いで家に戻る祖母。やがてすぐに帰ってくる。

祖母の手には白い封筒らしきものが握られていた。

「これ。或君にとってあの子から預かったの。今のうちに渡しておくわね」

祖母はレターを或に渡す。少し厚みがあって中に何か入っているようだ。レターの裏には

零奈の字で『或へ』の文字が。

「ありがとうございます。では」

或はもう一度礼をして歩き出す。手紙を読むべく一度家に帰ろうと帰路についた。

帰宅した或は一目散に自室に飛び込み机に座る。封筒をバッグから取り出して丁寧に開封する。

「零奈……」

中から出てきたのは紙とネックレス。このネックレスは零奈のイニシャルRが入っている。そして或の首にもイニシャルAのネックレスが。これは昔、零奈が或への誕生日プレゼントで送ったもので、お揃いで買ってからお互いずっと付けているものだ。

ネックレスを握りしめたまま或は同封されている手紙を開けた。
『或へ。』

手紙を書くの久しぶりだね。こんな形になっちゃってごめんね。やっぱり喧嘩しちゃったから顔合わせづらくて。この前はごめん。或に勘違いさせるようなこと言っちゃってずっと後悔してたんだ。そのうちに引越し終わっちゃって。

それと、両親の死に政府が絡んでいることが解った。だから真相を確かめることにする。最後に、同封したネックレスは傷つけないから或が保管しててよ。もしまた会えたら、その時にね。

私の大好きな幼馴染。この想いは直接伝えたかったな』

手紙の最後の文には涙で濡らしたのか少し紙がふやけている。手紙を読み終えた或の目にもいつの間にか、涙が溢れていた。

『俺が変な意地張らなければ……』

意地を張って言い返さなければ、素直になって謝っていけば、零奈を笑って送り出せていただろう。後悔が押し寄せて来る中、もうひとつ疑問があった。

『あいつ、なんでネックレスを……』

『わざわざネックレスを同封した理由だ。わざわざ外す必要なんてないはずだ。』

『それに『真相がわかった。確かめる』って……まさか』

更に政府が絡んでいると書いてある。それに何か嫌な予感を感じた。

『復讐……』

あの温厚で優しい零奈が復讐なんて考えられない。だが、かねてから零奈は或に能力者と無能力者にある溝について嫌悪していたり、そんな世界を恨んだりしていた。この件に関しては復讐を考えていてもおかしくはないとも考えることもできる。更に最後の『もしまた会えたら』の一文。或にはどうしても『もう会えない』という意味を含めた言葉にしか見えなかった。

『命を投げ捨てても復讐をする……ってことだよな』

わざわざこんな形で嘘をつくはずがない。文末の涙もその表れだろう。

『……よし』

或は覚悟を決めた表情で、手紙を机に置いた。

『行くか。異能街』

直接零奈を止めるべく、或は関東に行くことを決意した。

※ ※ ※

『到着……つと。ここが新東京か』

雲一つない晴天。澄み渡る空の元、或は新幹線を下りた。辺りを見回すとそこには、溢れんばかりの人、そこら中に張られた広告、或の目に映るのはどれも地方の田舎では見られな

い新鮮なものばかりだった。

「すげえな。さすが都会」

いかにも田舎者のような独り言をつぶやくも、誰も反応しない。

あの決意から一週間、或はすぐに準備を始め地元を発(ルビ・た)った。その間零奈に何度か連絡を取ったが音沙汰無し。手紙もあれ以来送られてくることはなかった。

「異能街に行くには……こっちか」

まずは迷路のような駅を出るべく、駅構内の案内図を見ながら足を進めた。

歩くこと数分、駅から外に出た。外は駅中よりも数倍の人がいて、或はその人々に圧倒された。

「人多すぎだろ……」

ケータイの地図アプリを見ながら異能街を目指す。目的地は異能街。新東京から歩いていける距離にあり、その場所は新東京の駅からでも見える。異能街を覆う高い壁に、さらにそれを超える高さのビルがその存在感を示している。

「あの中に、零奈が」

送られてきた手紙。零奈は今、あの中で両親の死の真相を知るために奔走している。恐らく危ない橋にも平気で踏み入れるだろう。

「絶対に……連れ戻して見せる」

手首に巻いたRのネックレスに触れると純粹で無垢な零奈の笑顔が思い浮かぶ。いつも或を気にかけてずっと傍に居てくれた零奈に、或は少しずつ想いを寄せていた。もし零奈が命を擲てばその想いも届けられない。だからここで連れ戻さなければいけないと或の心を掻き立てる。

目的を果たすべく、或は異能街へ足を進めた。

異能街と通常都市を繋ぐ関門『入国管理事務局』。ここで手続きを踏み通行証を貰わなければ異能街と通常都市を行き来することはできない。目的こそあるが果たして『人探し』で中に入れるだろうかと或は緊張していた。更にこの壁の向こうには自分が知らない、未知の世界が待っている。

「……よっし、行くか」

両手で頬を叩き気合を入れる。或は事務局へと入った。

中は市役所のような作りになっていた。入り口から出口まで一直線に伸びる通路。その先にある扉から向こうはもう異能街になっているのだろう。通路を挟む両脇には局員のデスクワークスペースが広がっていて、多くの局員が居た。或は通路の中央部にある窓口に向かう。窓口には中年ほどの男性局員が座っている。

「あの……通行証をいただきたいのですが」

「はいはい。じゃあこれに必要な事項の記入とサインをお願いしますね」

局員は引き出しから一枚の用紙を或に渡す。用紙には名前などのプロフィール、入国目的

や帰国時間などを記載する欄があった。

(ここで嘘書いても面倒ごとになりかねない。ここは全部事実を書くべきだな)

或は目的欄に人探し、帰国時間に夜を記入した。その他を埋め局員に渡す。

「へえ、人探しとは珍しいね。それにまだ十七歳なんて」

「少し事情がありまして……」

「人探しなら一応データ照合もできる。異能街に住んでる人たちのデータは全員分入っているからな。やってみるか?」

早く見つかると越したことはない。或は零奈は引越しを終えたとも聞いていたのでデータは見つかると思った。

「お願いします。名前は桐谷零奈。俺と同じ年の女性です」

情報を渡すと局員は手元のパソコンに入力した。

「ん……おかしい。出てこないぞ」

「どういうことですか?」

「どうもこうもデータがない。その零奈って子が異能街にいるのは間違いないのか?」

「その筈ですが……」

「じゃあこちらでも探しておこうか。とりあえずこれ通行証ね。見つかったら連絡するよ」

「……ありがとうございます」

データがない、ということに疑問を感じる或。いくら引越したのが最近だからと言っても既に異能街にいるのにデータがないなんてことあるのだろうか、と考えるも異能街や事務局の勝手すらわからない。

ひとまず通行証を貰い事務局を出るべく、通路を進んだ。

扉がすぐ具目の前にあり、これをくぐれば異能街だ。或はひとつ深呼吸をして扉を開ける。すると広がったのは普通の都市風景だった。

「ここが……異能街」

或は異能街に「廃れた街」というイメージを持っていた。だがそのイメージはひっくり返される。

「そのキミ、少し待ってくれ」

景色を見てみると後ろから声を掛けられる。振り返るとそこには先程の局員より少し年上気味の男性が立っていた。

「えっと、何か?」

「さっき聞いたんだが人探しをしているんだって?」

「ええ、まあ。でもデータも無いみたいで……」

事情を話すと男性は懐から一枚の名刺を取り出す。

「ここに行ってみるといい。きっと力になってくれるだろうからね」

或は名刺を受け取る。するとそこには『陣馬(ルビ・じんば)探偵事務所 陣馬慶真(ルビ・

けいしん)』と書かれていた。

「俺の知り合いが探偵をやっている。それでもって異能街では幅も効く。まあ少し性格に難があるが……きつと役に立つと思う」

「ありがとうございます！ これからどうしようか悩んでたところなんですよ」

「そうか。じゃあ俺は仕事に戻るが……このことは他の局員には内緒だぞ？」

「は、はあ。それはまたどうして」

「……事情を知ればわかるさ。じゃあな」

局員は中に戻って行った。或は名刺を眺める。表には『陣馬探偵事務所』『代表 陣馬慶真』と電話番号、住所が記載されている。裏面には恐らくさっきの局員が手書きで書いたと思われる簡単な地図が載っていた。

「とりあえず行ってみるか」

行く宛てが無かったのだ、行く先が見つかったうえに協力者がいるかもしれないという好都合。或は裏面の地図を頼りに歩き出した。

「ここ……だよな」

地図を頼りに歩くこと十五分。或は雑居ビルの前に立っていた。ビルの玄関口前には『2F 陣馬探偵事務所』と書かれた看板が立っている。或は恐る恐る中に入り階段を上がる。二階に上がると一階とは打って変わって扉回りがきっちり掃除整頓された空間になっていた。或は扉の前に立ちノックする。

「開いてるぞ」

中から聞こえていたのは低く野太い男性の声。或は扉を開ける。

「……若造とは。珍しい客だな」

中には少し年の行った男性が奥のデスクに座っていた。スーツを着崩しサングラス越しに或を見つめる。

「陣馬さん……ですか？」

「ああ、そうだが」

「俺、鈴原或って言います。調べてほしい事があって……」

「だろうな。どんな依頼だ？ ざっくり言ってみろ」

或は出入り口の扉前に立ったまま話を続ける。

「実は探してる人がいて……」

その言葉を聞いた途端、陣馬は苦い顔をした。

「悪いが人探しは受けてねーんだ。他所を当たってくれ」

陣馬は手を払い帰りを促した。或はそれに負けることなく口を開く。

「事務局のデータにも無くてどこにいるかもわからないんです。それに局員の人にここを頼れって……」

ありのままを伝える或。すると陣馬は溜め息をして懐に手を伸ばす。すると出てきたのは煙草だった。室内だが構わず火を点ける。

「……まったく、面倒事押し付けやがって……。仕方ねえ、話だけは聞いてやる。そこ座れ」
陣馬は来客用の椅子テーブルに或を通す。或は一礼してテーブルに着いた。

「それで、詳しい事情とか色々あるんだろ。話してみろ」

あまり話を聞く気ではなかった陣馬だが、或の対面に座る。話は聞いてくれるようだ。

「……俺と幼馴染……桐谷零奈って言うんですけど、地方からここに来たんです。零奈は能力者で異能街に引越すことになったんです。その時に喧嘩して喧嘩別れになっちゃって……」

「そうじゃねえよ。俺が聞きたいのは何故そいつを探してるかってことだ。ここを紹介されたってことは大方何か都合が悪いことがあったんだろ」

「は、はい。確かに異能街に引越したはずなんですけど、データが無いって言われて。それにこの手紙も……」

或はバックから零奈から送られてきた手紙を渡す陣馬はそれを受け取ると煙草をくわえたまま中を確認する。

「ふむ……。政府絡みか。ここに書いてる両親の死っていうのは？」

「零奈の両親は異能街に住んでたんですけど、事故で亡くなったんです。彼女はどうしても裏があると睨んで、異能街で真相を確かめるって」

陣馬は手紙をテーブルに置くと顎に手を当てて考える素振りを見せた。

「彼女の両親の名前は？」

「風靡誠(ルビ・ふうびまこと)さんと風靡凧(ルビ・なぎ)さんです。零奈は祖父母の家に引き取られて苗字こそ桐谷になってますけど」

零奈の両親の名前を出した途端、陣馬の眉がピクリと動いた。

「風靡……か。なるほどな」

そのまま黙りこくってしまう。或はじつと陣馬の顔を見つめる。顎に手を置いたまま、難しい表情をしている。

「……多分、零奈は政府に復讐しようと考えてると思うんです。それを止めたっていうのもあるし……何より喧嘩別れだったので謝りたいんです。だから……お願いします」

或は深々と頭を下げる。陣馬は煙草の煙を吐き出しながら言った。

「……わかった。本来人探しは受けないが今回だけは特別に受けてやる」

「……! ありがとうございます！」

「ただひとつ条件がある。俺は依頼を請け負う時に金はあまりとらない。恩を売っていつか返してもらって形にしているからだ。だが無能力者のお前に恩を売ったところで意味がねえ。だからこの事務所の雑務をしる。それと、この件は俺の気が向いた時に調べる。他の依頼だつてあるんだからな。この二つを受け入れるなら依頼を受ける。どうだ？」

提示されたのはめちゃくちゃな契約内容だった。『事務所の雑務』と『気が向いた時に調査』。後者に関しては気が向かなければやらないということ。いくら働いても調査してもらえないという可能性が或の頭をよぎる。だが

「……わかりました。それで大丈夫です」

或は考えた結果、頼むことにした。

(無闇に駆け回るだけじゃ到底見つけることはできないだろう。データも無い上、政府が絡んでる以上政府や局は危ない……。そうなれば誰かに協力してもらおうしかないんだ。多分ここを紹介してくれた人もそれを承知でここを……)

思考を巡らせる或。これが一番適切だと考え、条件を呑みここで零奈を探すことにした。

「ようし、なら契約成立だ。じゃあ……」

陣馬は吸い終わった煙草を灰皿に捨て、奥のデスクへと移動する。そこから紙を一枚持つてくると再び或の前に座った。

「これに契約のサインをしてくれ。あと空いてるところに電話番号もな」

契約書を或の前に出す。或はそれにサインをした。

「これで成立だな」

「よろしくお願いします。……ところでなんですけど、異能街ってどんな所なんですか？今日の昼前に着いたばかりなので何も知らなくて……」

「何だ、何も調べずに地方から来たのか」

「多少は調べましたけど……やっぱり実物を見るのとはわけが違うっていうか……」

「はあ……そこからか。俺は一から教えてやれるほど暇じゃない。そうだな……この街に詳しい奴を呼んでやるからそいつに聞け」

陣馬は立ち上がりデスクから携帯を取り出す。

「もしもし、俺だ。今から事務所に来れないか？」

電話の相手はさつき言っていたこの街に詳しい人間のようだ。口調やトーンを全く変えず淡々と話す陣馬。

「ああ、わかった。じゃあ頼んだ」

短い会話の末、通話が終わる。

「今から来てくれるってよ。そいつが来たら俺も出払うからよ」

「その詳しい人っていったい……」

「まあ来りゃわかる」

陣馬はそれ以上何も詳しい話をせず、人が来るまで待った。

数分後、来客によって事務所の扉が開いた。中に入ってきたのは

「お待ちせしました」

「おう 菜奈(ルビ・まな)。悪いなわざわざ」

或より少しだけ見た目が幼い少女だった。或は陣馬や入国管理事務局の局員のような歳の行った男性だとばかり思っていた。それにこの街に詳しいといった文言が付いていた為、より一層固定概念が付いていた。だが目の前に出てきたのは可愛らしい少女。そのギャップに或は戸惑ってしまう。

「いえいえ。それで今日はどうしたんです？ 陣馬さんから連絡なんて珍しいですね〜」
ほんわかとした雰囲気を漂わせる少女は或に気が付くとコクリと軽く一礼。

「頼みがあつてな。コイツ、今日からここで働かせることにしたんだがまだ異能街に来て間もない。だから案内とか説明とかしてやってほしい」

それを聞いた少女は表情を明るくさせ頷く。

「なんだあ、それならお安い御用ですよ！ っていうか、陣馬さんが人を雇うなんてどういう風の吹き回しです？ まさか跡継ぎとか」

「んなわけあるか、雑務だ雑務。それで俺はこれから用事でここ空けるからよ。鍵も任せていいか？ 流石にコイツに任せるわけにはいかねえからな」

思ったよりもフランクに接する茉奈、と呼ばれた少女と陣馬は親しい仲のようで、或は置いてきぼりのまま会話がどんどん進んでいく。一先ずこの茉奈という少女についていくことになるらしい。

「了解です！ じゃあまた後程電話しますね」

「つてことで鈴原。今から茉奈に案内してもらおう。何かあったらコイツに聞け」

「わ、わかりました」

陣馬は茉奈に鍵を渡す。先程話していた事務所の鍵だろう。

「戸締りさえすれば外に出てもいいからよ。じゃあよろしくな」

「はい！」

そういうと陣馬は外に出ていった。中に取り残された二人。来客用の椅子に座っている或に、茉奈は近づいてきた。

「よろしくね〜！ 私は**戌舞(ルビ・いぬまい)**茉奈、渋谷のチーム戌舞格闘倶楽部に所属してるんだ」

「は、はあ。俺は鈴原或。見ての通り無能力者です。よろしく」

或は自己紹介と共にポケットに入っている通行証を茉奈に見せる。

そして自己紹介を終えると茉奈は或の隣に座る。グイグイ距離を詰めてくる茉奈に少したじろいでしまう或。

「ふむふむ……。んー、何から説明したらいいのかわからないからとりあえず聞きたいことをじゃんじゃん聞いて！ 答えられる範囲で答えるから」

「じゃあ……まずは異能街から、ですかね」

質問を投げかけると、茉奈は眉間にしわを寄せて小難しい顔をした。

「ストップ。説明の前に或くん歳いくつ？」

「歳は……十七ですけど」

「なんだタメじゃん！ じゃあ敬語は無しね、ムズムズするから」

「あ、はい……つて、戌舞さんタメなんですか!？」

少し幼い見た目に年下だと思っていた或だが、同年代ということに驚きを隠せなかった。

「敬語」

「あ、ごめんなさ……悪い」

無理矢理敬語を直して茉奈に話しかけると、茉奈はとても嬉しそうな顔をした。

「うんうん♪ それでなんだっけ……。あ、そうそう異能街についてだったね。まあある程度は知ってると思うけど……。異能力を持った人間が集まった異能力者専用の都市。過去に戦争があつて更地から作ったんだけど現状は不便なくみんな暮らしてらつて感じかな」

やはりそうか、と或は異能街に踏み込んだ時のことを思い出した。或が想像していたよりも活発で普通の街だった。新東京や他の県に比べれば劣りに劣るが、それでも地方の田舎よりは全然活発に動いている。

「なるほど……。じゃあチームってのは？ さっき戌舞さんも所属してらつて言つた」

二人は座つたまま話を続ける。

「茉奈でいいよ。チームって言うのは自衛組織みたいなものなんだ。さっきも言つたけどこの街には能力者しかいない。だから犯罪やトラブルが多発する。一応中央区の治安維持部隊がいるんだけど、それだけじゃ防ぎきれないことが多いからね。それらを防ぐために自然発生したのがチームなんだ。異能街は大きく五つの区に分かれてる。池袋、渋谷、足立、新宿、中央区。異能街を取り仕切る中央区にチームはないけど……。他の四区にチームがあるんだよ」

「そのチームってのに入つてるわけだな」

「そうだよ。戌舞格闘倶楽部つて言つて、お兄ちゃんが立ち上げた渋谷のチームなんだ」

茉奈は「ふふん」と鼻高々に或を見た。

「へえ……なるほど。そんなものがあるのか……。本にはそんなこと書いてなかつたな……」

地元では異能街について調べる機会を多く作つていた。放課後は図書室にこもつて異能力について、異能街について、異能力戦争についてを勉強していた。だがチームなんて存在はどこにも開いていなかった為に、或は興味を持った。

「じゃあさ、他にどんなチームがあるんだ？」

「んー、私の主観になつちゃうけど……。それでも良いなら」

「ああ、構わない」

すると茉奈は自分の携帯を取り出した。そして写真フォルダを開き或に一枚の写真を見せる。

「これは？」

映つていたのは茉奈を含め三人の集合写真のようだ。一人は屈強な男性、もう一人は和服を着た上品な女性。

茉奈は自分も画面を見れるよう更に或に近づき共に画面をのぞき込む。

「ここに写つてる男の人が私のお兄ちゃんで、うちのリーダーだよ」

或はこの男性に少し見覚えがあつた。

「この人……どこかで見たな」

「私のお兄ちゃん、総合格闘技で日本一なんだ。だからテレビとかにも出てるよ。それでじ

やないかな

「そう……かもしれない。確か名前は……戌舞樂兜(ルビ・がくと)選手？」

「大正解！」

ここで或は思い出した。昔何気なく見ていたテレビで、「総合格闘技の日本一決定」や「国内に敵なし！」と騒がれていたのを見たことがあった。

「ああ……ってことはなんだ、茉奈はその最強の選手の妹ってことか!？」

「そ。びっくりした？」

或自身、樂兜について詳しく知らなかった。茉奈の苗字を聞いた時もピンとは来なかったが、こうも身近になると驚きを隠せない。

「あ、ああ……。それで、こっちの女性は？」

「そうそう、話が逸れちゃったね。この人は楠八重義乃(ルビ・くすやえよしの)さん。池袋のオウルってチームのリーダー。すごく大人しくて、綺麗なんだあ〜！ オウルは比較的おとなしいチームなんだけど、戦いになるとすごく強いのに」

或は写真に写る義乃から、戦う姿を想像することができなかった。

「……ん、でも四チームあるんだろ？ あとのふたつは……」

この写真に写っている茉奈と樂兜は渋谷のチーム、義乃は池袋のチーム。残り二つが写っていない。

「義乃さんとは個人的に仲が良いからね。これはその時の写真。後の二つはまあ少し事情があるのかなんというか……」

茉奈は苦笑いで携帯をしまう。恐らく義乃に比べて仲が悪いということだろう。茉奈はそのまま画面をスライドして次の写真に移る。するとそれはスキンヘッドで腕に入れ墨を入れた凶暴そうな男が暴れている写真だった。

「こ、この人は……？」

「足立のチームリーダー、九頭竜嶺雅(ルビ・くずりゅうりょうが)。コイツは見た目通りのクソ野郎だよ」

茉奈の顔が陰しくなる。見た目通りに危険人物だと或は感じ取った。

「なんていうか……アウトローな感じだな。ギャングっぽいついていうか」

「その通り。九頭竜は愚連隊『BAD GUY'S』通称バッドを率いるリーダーで、コイツは異常。平気で人を罾(ルビ・なぶ)って犯罪にも手を染めてる。そんなやつがリーダーなんてホントに勘弁してほしいよ」

愚連隊。やはり異能街にもそのような存在がいる。異能力を持っていてそれを振りかざす人間がいることもあり、それが不良やヤクザのような悪用する者たちの場合もある。

「でもただ暴れるだけじゃなくて、九頭竜は狡猾(ルビ・こうかつ)で頭が良いからね。それも一種の武器なんだよ。……で残りの新宿のチームなんだけど」

或はまた写真があるのかと思っていたが、茉奈は携帯の電源を切りポケットにしまった。しまった。

「残念なことに写真とか情報があんまり無いんだ。チーム名はスモーカーズ。リーダーは麻宮霧(ルビ・あさみやきり)。私たちと同年代なんだけどチームの目的も何人が所属してるのかもわからない。噂だと中央区と絡んで汚れ仕事任されてるって噂もあるけど……」

「汚れ仕事？」

「そ。中央区は日本政府と裏で陰謀(ルビ・いんぼう)を企(ルビ・くわだ)てて、その汚れ仕事……まあ都合の悪い人間を消したりだね。そんなことをしてるって噂もある……でもまあ根も葉もない話だろうけどね」

その言葉を耳にした途端、或の脳内に零奈の顔が思い浮かんだ。

もし仮にその噂が本場で、零奈の両親の死にも関わっているならばスモーカーズへの接触が必要になってくる。

「……と、まあチームに関してはそのような感じかな。一般人に手出しするのはご法度だし或くんから手出ししなければ大丈夫だと思うけど……」

「けど？」

零奈は少し曇った表情になってしまう。

「ここ最近、チーム同士がピリピリしてる気がするんだ。気のせいで済めばいいけど……もしかしたら或くんも巻き込まれるかもしれないからね。その辺は気を付けて」

「お、おう」

零奈は一度ソファから立ち上がりうんと伸びをする。

「んーっ、よし！ じゃあ一回説明も終わったことだし外行かない？ 続きは歩きながらでもしようよ」

「わかった」

そういえば鍵を預かっていたな、と或は思い出した。それに異能街に来たといってもまだ何も見ていないし知らない状態だ。丁度いい機会だろう。

二人はそのまま事務所を出た。

外に出ると既に夕日が出始めていた。

「それで、どこに行くんだ？」

「うーん……特に決めてないけど、その辺歩こうよ。色々案内してあげるからさ」
先に進む零奈に着いていく形で或も後を追う。

「……にしても、普通の街だな」

周りを見渡せば普通のマンション、店、歩く人々。来た時感じたが、じっくり見てみると普通だとより強く感じるができる。

「なにそれ、異能街をどんな場所だと思ってたの？」

「なんかこう……廃ビルとかいっぱいあって、常に能力が飛び交ってるような……」

「あはは、それじゃあ世紀末だねー。一応各チームが各領土区分を治めてるんだ。だから能力戦が横行(ルビ・おうこう)したりすることはないかな。……絶対とは言い切れないけど」

或はチームについて段々と理解してきた。自衛組織であり家族のようなもの。恐らくこの異能街で零奈を探すにはこのチームと言う存在が必ず関係してくるだろう、と或は覚悟を決めた。

「あ、ここが中央区だよ。異能街をまとめる役割を持つってるけど……まあ形だけって感じかな」

目の前に聳(ルビ・そび)え立つのは大きく高いビル。或が異能街に入る前、駅から見えたものだ。

「……さっきのチーム説明の時も思ったんだが、中央区にチームはないのか？」

茉奈から受けた説明では異能街は五つの区分に分かれている。それで中央区を除くほか四つにはチームが存在するが中央区には無かった。或は先程からそれが気になっていた。

「チームはないけど能力者はいるし、治安部隊もある。もっと言えば権力もあるからね。ま

ず必要ないんじゃないかなあ」

「権力……」

「中央区は現日本政府の一部だからね。なんでも政府のトップから直々に頼まれた人が管理してるとか。あんまり聞かない話だよな」

或は現日本政府、と言う言葉に反応した。零奈からの手紙に書いてあったことを思い出す。『両親の死に政府が絡んでいる事が解った』

それが本当なら、零奈は政府と戦っていて、零奈を探し出そうとしている或も政府と戦うことになるかもしれない。今茉奈が言っていた中央区の能力者、治安部隊、更には権力と戦うことになってしまう。それに加えチームとの衝突も考えられる。目的達成までの道のりは、茨の道なんてものじゃない。

「……ははっ」

難易度が極めて高い。障害を考えるだけで笑いがこぼれてしまった。

「どうしたの？」

「……なんでもない。でかいなと思ってさ」

「だよね。……あ、そういえばさ、或くんはなんで異能街に来たの？」

そういえば話してなかったな、と或は口を開いた。

「まあその……人探しだ」

「人探し？」

「ああ。この間に越してきたやつが俺の幼馴染みなんだけど、そいつと色々あってさ。陣馬さんに協力してもらって探してるんだよ」

その難易度が高いことを今身に染みて感じたところだが、なるべく深い事情は話さない方が良く考えた。

「へえ。幼馴染み……。女の子？」

「そうだけど……」

「そっかさっか。じゃあ好きなんだねえ」

「……ん？」

耳を疑った。

「いやあ、いくら幼馴染みでも無能力者がこんな場所までくる？　って思ったからさ。で、どうなのどうなの？」

目をキラキラ輝かせながら茉奈は或に詰め寄った。

「いやまあその……なんだ……」

しどろもどろしている或を見て、茉奈はにやりと笑った。

「なるほどお……凶星ですかあ」

言われた途端、或の顔が真っ赤に染まった。どうやらその通りだったようだ。それには茉奈も納得した顔を見せる。

「いいだろ俺の話は！　それより聞きたいことがまだあるんだ」

二人は再び歩き出し、中央区のビルを背に向けた。

「えー。もつと聞きたいんだけどなあ……。まあそれはいつかの機会についてことで。じゃあ次は軽くこの辺を案内してあげる」

「ああ、頼む」

「じゃあ最初渋谷に行こうか」

未だ顔が赤い或だが、気を取り直して再び歩き出した茉奈に着いていく。

「で、聞きたいことって？」

「陣馬さんについてだ」

或は陣馬を紹介された時から少し疑問に思っていたことがあった。入管の局員に知り合いがいたり、その割にはこじんまりとした事務所だったり、謎な部分が多いからだ。

「陣馬さん？　うーん、私もよく知らないんだけどなあ」

「俺よりは知ってるだろ。ちなみにいつ知り合ったんだ？」

「んー、私はチームに所属してからかな。最初は所属する気なんて無かったけどお兄ちゃんが心配だね。それで入ったんだけど、そこでお兄ちゃんに紹介されたのが初めてだったかなあ。あと知ってる情報といえば陣馬さんはあんな見た目でも三十代前半なんだって」

「えっ、そうなのか!?　意外と若いんだな……」

或はもう少し年上だと思っていたが意外だった。

「だよね〜！　性格もおじさんみたいだし、私も最初知った時ビックリしたもん」

年上であるならこそ、茉奈のような若い人たちと繋がりがあるのが少し謎だ。

「ま、陣馬さんって誰に対しても自分から動くからね。知り合いが多くいても不思議じゃないかな。或くんは何で陣馬さんの所で働くことになったの？」

「さっき言った幼馴染を探すのと交換条件でさ。あと気が向いたときに調べるって。結構めちゃくちゃな条件出されて……」

皮肉そうに或が言うと茉奈は苦笑いをしてみせた。

「まあ陣馬さんは昔からあんな性格だしね。或くんが折れたら負けだと思っよ」

「勝ち負けの話じゃないんだけどな」

「あ、確かに。でも挫けたらダメだよ。先輩の私からアドバイス！」

「先輩って。タメでしょ」

「あはは〜」

へらへらと掴みどころのないな、と或は思ったがそれがまた話しやすくもある。その後も或は異能街について話を聞いた。

「到着！　ここが渋谷だね、アジトとかまでは案内できないけどやっぱ若い人たちが多
いかな。高校生とか」

話しながら歩いていると、『渋谷』と書かれた看板が目に入る。恐らくここから先が渋谷
のようだ。

「高校生……」

辺りを見ると確かに年齢層が若い人たちが街を歩いていた。或と同年代か年下の人間も
能力者でここにいる。そのことに少し引け目を感じてしまう。

「そういえばなんだが、チームってどう分けられるんだ？　入りたいところに入るとか？」

「まさか。ほとんどは思想や出自、能力によってだね。例えば私のチーム『戌舞格闘倶楽部』
はメンバーがほとんどがお兄ちゃんが営んでる道場の門下生なんだ。足立のバッドなんか
はさつきも言った通り愚連隊の集まり。そんな感じで何かしらつながりのある人たちが構
成されていることが多いんだ」

チームにも色々あるのに加え、思っていたよりも複雑そうだと或は考えた。

「他の区を見に行くことってできるか？」

「うーん……それなら陣馬さんと一緒に行ったほうがいいかなあ。私といると他チームか
ら疑われかねないし……それに時間的にもそろそろ陣馬さんが帰ってくる頃だよ？」

或はポケットから携帯を取り出し時間を確認する。すると時刻は既に十八時を回って
おり、事務所を出たときに見えていた夕日はいつの間にか沈んでいた。気づけば辺りも暗く、
街灯やビルの光が目立っている。

「もうそんな時間か。そろそろ戻らないといけないな」

「私も鍵返さなきゃいけないし行こっか」

渋谷を後にした二人は、もう一度探偵事務所に引き返した。

「ただいま帰りました〜」

茉奈は自分で鍵を開け誰もいない事務所に明るい声で入っていった。

「まだ陣馬さん帰ってきてないだろ。つか自分で鍵開けたし」

「わかんないじゃーん。陣馬さんいつ帰ってくるか聞いてなかったし。……あ、そうだ。陣
馬さんに電話しなくちゃ」

茉奈は自分の携帯を取り出して陣馬に電話をかけた。内容は「今事務所に帰ってきた」と
簡単な報告だった。

「ま、或くんは雑用頑張りなよ。異能街に居れば陣馬さん通じて色んな人と会えるだろうし。私も呼ばれたらここ来るからさ！ なんなら呼ばれなくても来るけど」

「そうだな……。そういや、茉奈は陣馬さんに何か恩とかあるのか？」

陣馬が或と契約するとき『俺は金はあまりとらない。恩を売って返してもらってる』と言っていた。それに頼まれた茉奈は快諾していたし二人の間に何かやり取りがあったのかと少しばかり疑問に思っていた。

「まあねー。だいぶ前に依頼したんだよね。少しトラブルがあって。そしたら『金は取らない。いつか行動で返してくれたらいい』って言ってくれて。それに感動しちゃってその時から私は陣馬さんからの頼みには絶対答えるようにしてるんだ」

「……具体的に、何を依頼したんだ？」

「そんなの恥ずかしいから言いません。いつか、気が向いたらね」

当時の事を思い出しているのか、茉奈は懐かし気な顔をしていた。ただ茉奈が陣馬に呼ばれたときにすぐ来たことや、陣馬の頼みとはいえ無能力者の或に案内までしてくれたのだ。きつと茉奈本人が優しい人間であり、陣馬に恩があるからだろう。

「異能街の人間は気が向いたらつてのが多いな」

「みんな気まぐれなんじゃないかな。知らないけど」

来客用のソファに二人で座り陣馬を待った。

「戻ったぞ」

数分後に陣馬が戻った。疲れ切った顔で煙草を吸いながら事務所に入ってきた。

「あ、陣馬さん！ お疲れ様です」

茉奈は親を見た子供の様に陣馬の元へ駆け寄っていく。

「これ、事務所の鍵です」

「おう、ありがとな。大丈夫だったか？」

「はいっ！ 基本的な事は教えたのでここで生活する分には困らないと思います」

「……生活？」

或はその単語に疑問を抱いた。

「そうだ。ついさつき入管で申請してきたんだが……ほら。今日からここに住み込みで働いてもらうことにした」

陣馬は鞆から一枚の用紙を取り出し或に渡す。或がその紙を見る際、茉奈も横から覗き込んできた。その紙には太字で『許可証』と記載してある。

「さつき局員に頼んで特別な。うちに長期滞在することができるようにしといたんだ」
「やっぱりこれを取りに行ってたんですね。だと思いましたがよ」

まるで陣馬の行動をわかっていたかのように茉奈がにこやかに笑いかける。

「つてことは俺、ずっとここで働くんですか!? 休みとか……」

「そうは言っていないだろ。それに長期滞在といっても別に異能街から出られないわけじゃない。空いた時間にも行ってくりゃいいさ。それに雑務するって条件で契約結んだんだ。

「一回一回入管通るよりこっちのほうが楽だろ」

「そりゃあそうですけど……」

或はいきなりすることに戸惑ってしまった。或自身、別に家を借りているわけでもなくホテルで生活しようと考えていた為、丁度良いと言えば丁度良いのだが、いきなりすることに驚きを隠せない。

「流石陣馬さん。行動早いですねー」

「一応探偵だからな」

陣馬と茉奈は二人でにやりと笑う。或はそれを見てため息をつくが、一旦頭を落ち着かせて考える。

この話は或にとっても悪い話ではない。陣馬が調査をしてくれなくとも、自分が動くことができるからだ。それに、茉奈のように能力者でありながら協力的な人もいるかもしれない。協力を仰げれば見つけることも容易になってくる。

「で、どうすんだ。つってももう許可証も取ったからどうもこうもないが」

「……わかりました。お世話になります」

或は陣馬に向かって礼をし、陣馬もそれに頷く。

「それじゃあ私はそろそろ帰りますね。遅いとお兄ちゃんが心配するし」

帰り支度をしながら茉奈が二人に言う。それに気づいた陣馬は一度時計を見た。

「おっとそうだな。俺が樂兜にどやされちまう。今日は急だったのにすまなかったな。助かった」

「いえいえ、また何かあれば呼んでください！ 或くんも頑張ってたね」

茉奈は帰り支度を済ませて再び陣馬と或に向き合う。その後一礼して事務所を出ていった。

「面白い奴だろ」

「……はい。面白くて優しい人でした」

二人になった事務所は静寂な空間になっていた。陣馬は吸っていた煙草を灰皿に入れ、デスクに座る。

「チームに所属してるやつらは一癖も二癖もあるやつばかりだ。茉奈みたいなやつは稀(ルビ・まれ)だな。ところでお前の仕事だが、今日は特にならない。明日の朝から働いてもらうかな」

「わかりました。……ところで、住み込みって言うてもどこで寝ればいいんですか？」

或は住み込みで働くというのを聞いてからずっと疑問だった。この事務所は見る限りこの部屋ひとつとトイレ、奥に部屋があるのか扉がひとつ。見える限りだと生活できそうなスペースはこの部屋しかない。

「お前はその辺のソファでいいだろ」

「そ、ソファですか……。陣馬さんはいつもどこで寝てるんです？」

「俺はあっちの奥。俺のプライベートルームだからな。入ってくるんじゃないぞ」

唯一の空き部屋だと思っていた奥の部屋は陣馬の部屋だったようだ。結局住み込みといっても居候のような扱いだっただ。

「文句あるならどっかアテがあるところに行くんだな。ちなみに異能街にホテルはない。どうするかはお前の勝手だ」

陣馬はコートや帽子をハンガーにかけるとそのまま奥の部屋に行く。

「腹減ったらその冷蔵庫から適当に食べ。俺は仕事すっから」

そのまま部屋に入ってしまった。取り残された或はソファに座り寝転がる。携帯を起動するも誰からもメッセージは来てない。思い返せば、或が携帯でやり取りをするのはほとんどが零奈だった。だが前に送ったメッセージにも返信はきてない・

「……どこにいんだよ」

或の頭の中に零奈との思い出が駆け巡る。暫(ルビ・しばらく)く思い出に浸(ルビ・ひた)り横になっていると、瞼(ルビ・まぶた)がゆっくと落ちてくる。そのまま或は睡魔に勝てず眠ってしまった。

「ふんふん」

街灯が暗い夜道を照らす。人通りもほとんどなくなったその道を、茉奈はご機嫌な様子で歩いていく。

「或くんかあ……。陣馬さんに過労死させられないといいけど」

頭上には『渋谷』の看板が。そのまま進んでいくと、二階建ての立派な建物が堂々構えている。外の看板には『戌舞格闘倶楽部』の達筆な文字が彫られている。そのまま茉奈は中に入っていく。

「ただいま」

中に入ると、胴着を着た屈強な男性数名が一気に茉奈に視線を向けた。

「お疲れ様です。茉奈さん」

一人の男が頭を下げる。それにつられるかのように周りの男たちも次々と茉奈に向かって頭を下げた。

「お疲れ。みんなまだ稽古中？」

「いえ、丁度先程終わったところです。それより、樂兜さんが探してましたよ。見かけたら部屋に来るように言ってくれ、と」

「ん、わかった。ありがとう」

茉奈が歩き出すと男たちは道を作るかのように避ける。茉奈はそのまま道場の中を歩いて奥にある階段へと足を進める。

「お兄ちゃん。帰ったよー」

二階に上がり扉を開けると、そこに広がるのは普通の家にあるリビングだった。その真ん中に先ほどの男たちよりもより屈強で、威圧感のある背中で茉奈を迎える男の姿があった。

「……茉奈。どこに行ってた」

茉奈の方は向かず、座禅を組んでいる。この男こそ茉奈の兄、戌舞樂兜だ。

「ちょっと陣馬さんに呼ばれてねー。手伝いに行ってただけだよ」

兄に怖気づくこともなく、いつもの調子で茉奈は答える。

「そうか……。なら良いが……。出る際には俺か門下生に声をかけてから出ると言ってるだろう」

「心配しなくても私は平気だよ。もう十七だし」

「そういうことじゃない。もう少し危機感を持って言っている。いくら格闘技が出来ても、異能力に太刀打ちできない場合だってあるんだぞ」

「はいはい。気を付けるって。それじゃあ私お風呂入ってくるから」

茉奈は背を向けリビングを出る。二階はリビング、茉奈と樂兜の自室、バスルーム、トイレとごく普通の家だ。

一階は道場兼寮になっていて、門下生の寮スペースもある。

この道場は、樂兜と茉奈が経営しており、師範が樂兜一人に対し門下生が二十人ほど。門下生も全員能力者で、渋谷のチーム『戌舞格闘倶楽部』でもある。リーダーは総合格闘技日本一の樂兜、副リーダーに兄の血を継いでこの道場で二番目に強い茉奈。他のチームから一目置かれるほど強力なメンバーがそろっている。

「もう、心配性なんだから」

茉奈は一度自室に戻りベッドに寝転ぶ。樂兜が心配しているのは自分の為だと分かっているが過保護すぎる。

二人の両親は既に他界し、常に二人支えあって生きてきた。他の兄妹よりも強い絆で結ばれているからこそ、心配になってしまうのだ。

「ま、みんな強いから大丈夫でしょ」

茉奈は起き上がり入浴の準備をする。

これが渋谷のチーム『戌舞格闘倶楽部』の副リーダー、戌舞茉奈だ。

二 不穏

「おら、起きろ」

翌日。頬を叩かれ或(ルビ・ある)は目を覚ました。目の前にはジャージ姿の陣馬(ルビ・じんば)が或を覗き込んでいた。

「んあ……。おはようございます……」

起き上がると、ソファで寝たからか或の身体の至る所が悲鳴を上げている。

「おう。寝起きに悪いが仕事だ」

或は身体を起こして時間を確認する。時計の針は朝九時を指していた。

「あ……はい」

「とりあえず事務所やトイレの掃除と、領収書の整理を手伝え。それが終わったら午後から外に出るからな。掃除用具は外に置いてあるからよ」

「わかりました。……くあ〜」

欠伸(ルビ・あくび)をしながら或は一度外に出る。掃除用具を持つてくるとトイレ掃除から始めた。

トイレ掃除はものの五分程度で終わり、事務所の床を掃除しているときだった。

「鈴原。さっき言った外に出るっつー話だが」

デスクでコーヒーを飲みながら陣馬が話しかけてきた。

「さっき……あー、午後から外に言ってましたね」

「ああ。その件で何も知らないお前に少し教えてやる。チームの現状についてな」

「現状……。チームの話なら昨日教えてもらいましたけど」

或は手を止め陣馬の方を見る。陣馬はデスクに置いてある資料を一枚手に取り或に渡した。

「……報告書？」

資料の一番上には大きく『報告書』と書かれていた。或は報告書を手に取り読んでいく。

『『オウルとバッド間で不穏な動きあり』……なんです？ これ』

「見ての通りだ。今その二つのチームが少し揉めていてな。だから外での仕事するのはそれ関連だな」

第三者が介入するのか、と甚(ルビ・はなは)だ疑問に感じた。だが陣馬のことだ、誰とでもパイプを持っているに違い無いだろうと思いつい何も口は出さなかった。

「はあ、でもそれって俺が出る意味あるんです？ 俺が行ってもどうすることもできませんよ」

「わかってるよ。チームや異能力というものを、その目で見れるチャンスだぞ」

思い返せば、或は自分の目で異能力を見たことは無かった。本やテレビでは見かけたことがあるが本物は見たことが無い。というのも或が今まで住んでいた通常都市では開花したばかりの異能力者が能力を使うことはいかなる場合でも禁じられていたのだ。

「チャンスって……。というか何の為に？ 揉めてるチームがあるのはわかりましたけどわざわざそこに出向くなんて危険でしよう？」

或が聞くと陣馬は大きな溜め息をひとつ。

「見りゃわかるから今は知らなくていい。いちいち説明するのも面倒だからな。それよりも手え動かせ」

掃除を促(ルビ・うなが)すと或は自分の手が止まっていたことに気が付き再び手を動かす。正直ここにきてからというもの、説明は受けたが分からないことだらけだというのが或の感想だった。

見ればわかる、ということだったので陣馬についていけば何かわかるということ。興味が

湧(ルビ・わ)いたものにはとことん知りたがりの或はわくわくしていた。昨日茉奈(ルビ・まな)から受けた説明に加え今日から実際に異能街内部に向出くのだ。当初の目的を忘れたわけではないが、湧き上がる好奇心は抑えられない。或は早く掃除を終わらせるべく手を動かした。

掃除やら領収書の整理やら言われた業務をこなし続けて約一時間。陣馬に言われた仕事はやつと一段落ついて或はソファで休んでいた。携帯を眺めていると、奥の部屋から陣馬が出てきた。

「次の仕事だ。チームムところに行くぞ」

陣馬はコートを羽織り帽子もかぶってすぐにでも外出できるような恰好だった。

「はい！」

或はいつでも出れるよう準備をしていた為すぐに立ち上がる。陣馬の後に付いて行き外に出る。

「最初はどちらに？」

「池袋だ。一応言っておくが無用な口出しはするなよ。お前がまだ把握してない事情なんかも沢山ある。もし危険な目にあっても俺は知らん」

「はい。……そういえば、陣馬さんってどんな能力を持ってるんですか？」

そういえば聞いてなかったな、と或は咄嗟(ルビ・とっさ)に思い出した。茉奈にも聞いていなかったがもつと近しい陣馬の能力なら教えてくれるのではないかと考えた。

「俺は無能力者だ。今はな」

「無能力者なんですか!? ……それに、『今は』って」

歩きながら陣馬のことについていろいろ考えるが、どうも謎の部分が多い。見ず知らずの或に素性を見せないのもわからなくはないがそれにしてもだ。

「昔は能力者だったんだよ。今は能力も失って無能力者になっちゃったがな」

能力者が能力を失うことあるのだろうか。やはり異能力に関してはまだ謎の部分が多い。

「なんで陣馬さんは能力を失ったんですか？」

「教えねーよ」

気だるそうに答える陣馬。これ以上は聞いても教えてくれなさそうだ。

「にしても昨日から質問ばっかだな。しつこい男は嫌われるぞ」

「し、仕方ないじゃないですか！ 俺は何も知りませんし、誰かに聞かなきゃ……」

「知りたきゃ自分で調べるよ。他人に聞くよりずっとましだぜ」

「……いいんですかね。俺、無能力者ですけど」

「トラブルを起こさなければいいんじゃないか」

或は立ち止まって上を向く。視界には昨日見た中央区のビル。自分で動いても必ずぶつかってしまうであろう壁。本当にトラブルを起こさなければ自分で動いても問題ないのだからか。

「……何してんだ。置いてくぞ」

少し止まった間に陣馬は先に行ってしまった。或は急ぎ足で追いつく。それから少しの間或は考えながら歩いた。

「ここだ」

事務所から歩くこと十分ほど。到着したのは何の変哲もないマンションのような建物だった。

「ここが……池袋のチームの？」

「アジトだ。行くぞ」

見た目は五階建てほどの小さなマンション。その中に陣馬は躊躇うことなく進んでいく。或は少し緊張するも陣馬と一緒に大丈夫だろうと後ろをついていく。

中に入ると、一階はロビーになっていた。ポストや郵便物のロッカー、自動販売機しかない。二人は奥にあったエレベーターに乗り込む。陣馬が三階のボタンを押すとエレベーターが動き出した。

「こんな普通のマンションなんです。もっと倉庫とか廃ビルとかそういうところをアジトにしてるんだと思ってました」

「チームって言っても昔から存在するものだ。先代が使っていたアジトをそのまま使ってる場合も多い。それにこういったマンションだと防犯性は高いしな」

エレベーターの扉が開き中が露になる。すると中は普通のオフィスのような作りだったが人が少なく、主に身体つきが良い男がこちらを、というか或を窺っている。

「あの……何かすぐく見られてるんですけど」

辺りからの視線ほとんどが或に注がれている。

「気にすんな。……おう、**義乃(ルビ・よしの)**」

室内の真ん中を歩いていき奥に座っている女性に声をかける。その女性は見たことのある人物だった。

「この人……」

「あら、陣馬さん。お久しぶりですね」

茉奈から見せてもらった写真に写っていた人物、**楠八重(ルビ・くすやえ)**義乃だ。写真で見たと通り、上品で繊細な雰囲気を持っている。

「そちらの方は？」

義乃は或に目を向ける。その視線は室内の誰よりも優しく、暖かいものだった。

「今俺のところで雇ってる雑用だ」

「**鈴原(ルビ・すずはら)**或です。よろしくお願いします」

一礼すると義乃も立ち上がり或に近寄る。

「初めまして。楠八重義乃と申します。池袋のチーム、オウルのリーダーを務めさせて頂いております」

丁寧で低い物腰。或は「この人が敵ではない」と直感で感じた。

「それで、本日はどうされたのです？ いきなり来るなんて珍しいですから」

「まあ用事ってほどでもないんだけどな。最近バッドと色々あったらしいじゃねえか」
バッド、その名を出した途端室内の空気が張り詰めた。

「……もうお耳に入っておられるのですね」

「まあな。お前のとこは大丈夫だと思うが……念のためにな」

念の為、ということはここに来たのは釘を刺しに来たのだと或は悟った。揉めてている二チームを暴れさせないために陣馬が収めているのだろう。

「未だ襲撃等はされていませんのでこちらから出向くこともありませんが……いざとなれば私たちも迎え撃つ覚悟はできています」

義乃の目つきが鋭くなる。さっきまでの穏便な雰囲気とは打って変わって戦う意思を感じるほどだ。

「お前のことは信頼してるからな。そう判断したなら反対はしねえよ。まあ今日はそんだけだ」

「あなたも心配性ですね。私なら大丈夫ですよ。あちらの出方次第です」

「それについてもだ。最近バッド連中の悪事も大きくなってきている。いずれ手を出してくると俺は睨んでる。用心しとけよ」

「なるほど……。わかりました。あなたたちも良いですね？」

「「はいっ！」」

義乃は室内にいる面々に問いかける。すると勢いの良い返事が室内の至る所から帰ってきた。

「ま、あまり気張りすぎずにな」

「はい。陣馬さんも。これからどちらへ？」

「バッドのアジトだ。忠告しにな」

「そうですか……。陣馬さんなら大丈夫だとは思いますが、気を付けてくださいね。鈴原さんも」

急に名前を呼ばれて驚いたが、義乃は終始話しかけやすい雰囲気を作っていて初対面の或でも話すことが出来る。

「は、はい。そういえば義乃さん、俺、人探ししてるんですけど……」

或は義乃が何か知ってるかとも思い零奈について聞いてみることにした。

「人探しですか。それはまた珍しいですね」

「桐谷零奈(ルビ・きりたにれいな)っていうんです。俺と同じくらいの身長で、茶髪のポニーテールが特徴の……最近異能街に越したんですけど」

話してみると義乃は難しい顔をした。

「残念ながら存じ上げませんね……。池袋にいるなら私の耳にも入ってきます。ですからすぐに分かります。ですがそのような情報は入ってきてません。申し訳ございません」

義乃は深々と頭を下げる。

「だ、大丈夫ですから！ 頭を上げてください！」

慌てふためく或を見て義乃はふっと笑った。

「ふふっ。鈴原さんは面白い方ですね。ひとまずお探しの方はこちらでも見かけたら声を掛けます」

「ありがとうございます。……忙しい時にすみません」

「いえいえ。陣馬さんと一緒にいるということは陣馬さんにも頼んでいるのでしょうか？ その対価として雑用をしていると見えます」

義乃は、今の或の状況を的中して見せた。

「なんでわかるんですか!? 俺そんなこと一言も……」

「見てればわかりますよ。陣馬さんとの付き合いも長いですから」

そのやり取りを見ていた陣馬は何も言わずその場を去ろうとしていた。

「あ、陣馬さん！ 待ってくださいよ！ ……義乃さん、ありがとうございます！」

「いえいえ」

一礼し慌てて戻っていく或。陣馬は既にエレベーターに乗り込んでおり、扉を閉める直前だった。ギリギリ乗り込んだ或は陣馬と共に下の階へ降りていく。

最後まで二人を見送った義乃は満足そうな顔をしていた。

「鈴原或さん……。面白そうなお方ですね」

興味を持ったのかうつすらと笑みを浮かべていた。

「鈴原。次に行くところだが」

再びエレベーターの中、オウルのアジトには滞在時間ものの五分で次の場所に向かう。その中で陣馬はすこし疲れたような顔をしていた。

「さっき言っていましたね。バッドのアジトに行くって」

「そうだ。バッド連中にいいやつなんていない。あまり目立った行動はとるなよ。さっきみたいに人探しをしていることを聞くのもだ。相手が義乃だから良かったものの大概の相手はそうはいかない」

以前に陣馬から「茉奈のような優しい人間は稀にしかいない」と聞いていた。だから零奈について相談できるのは茉奈くらいのもものと思っていたが、案外そうでもないと知りつい話してしまった。

「でも義乃さんはとても優しい方でした。だから協力してくれるかも、って思ってた……」
すると陣馬は大きなため息をひとつ。

「あのなあ、俺は条件付きとはいえ仕事で請け負ってるからいいが、茉奈や義乃は自分の事に加えチームのこともあるんだ。お前の押し付けで回らなくなる可能性だってあるんだぞ。もう少し周りを見ろ」

陣馬に言われ或は自分の今までのことを振り返る。陣馬に依頼し、茉奈に続き義乃にも話してしまった。直接お願いしたわけではないが、これで荷を背わせてしまったと考えることはできる。

「……わかりました」

「わかりやいいい。次行くぞ」

エレベーターが開き外へ出る。陣馬はそれ以上何も言わずただ黙々と歩き続けた。
(第一陣馬さんが「気が向いた時に」なんて言うから俺も焦ってるんだよな。陣馬さんのせいではないけど……。にしても調べてくれてる様子はないし。ただ少し焦りすぎたのも事実か)

焦るな、と気持ちを落ち着かせて陣馬の後を追う。が、やはり早く調査をしてほしいという気持ちは拭えない。何も言わず、或はただ着いていった。

「ここだな」

歩き続けること十分。池袋からそのまま足立に向かってしていると段々街の雰囲気も変わってきた。壁や建物はポロポロで落書きが多くなり、まるで廃墟のような建物が増えてきた。

足立のチーム、バッドは茉奈から聞いた話だと愚連隊だ。そのチームがこの街を仕切った結果がこのありさまというなら納得はできる。

「何かすっごい治安悪そうですね……」

「悪そうっつーか悪いんだよ。一人になるんじゃないぞ」

さらに奥に進んでいく。人気はあまりなく静けさが雰囲気を引き立てている。暫く歩くと、ガレージのような大きな建物の前で陣馬の足が止まる。

「嶺雅(ルビ・りょうが)あ！」

目の前の扉に向かって大声で叫ぶ。すると扉が開いて中からガラが悪そうな男が数人出てきて陣馬と或を取り囲んだ。

「なんだア？ 喧嘩でも売りに来たのか？」

高圧的な態度をとられても陣馬は態度どころか顔色一つ変えずに答える。

「嶺雅に話がある。通せ」

「嶺雅さんだろ。気安く呼び捨てしてんじゃないぞ」

男たちは陣馬に詰め寄る。まさに一触即発のこの状況。もうダメだ、と或が諦めかけたその時、倉庫の奥から男の声が響く。

「どうした」

ドスの効いた低い声。その男の一言が、陣馬を除く全員を強張らせた。中から出てきたのはスキンヘッドで身体の見えるところほとんどに入れ墨が入っている巨漢。

「りよ、嶺雅さん！ ご苦労様です！」

今まで二人を取り過去っていた男たちが一斉にその男に頭を下げる。

「おう嶺雅。久しぶりだな」

「なんだアンタか」

思い返してみると、以前茉奈から見せてもらった写真そのものだった。この男が足立のチーム『バッド』のリーダー九頭竜(ルビ・くずりゅう)嶺雅。

「今日はちょこっと話があったな」

「……入れ」

嶺雅は倉庫の中へと戻って行ってしまった。陣馬も続くように中に入った為、或も陣馬の後ろにピッタリくっついて移動する。或は嶺雅や周りの男たちにビビってしまい何も喋れずにいた。ただの不良集団だと思っていたが、いざ対峙すると何をされるかわからない恐怖が襲ってくる。それに茉奈から関わらない方が良いと言われてるため元より行動するつもりはないのだが、それでも相手がお構いなしにくる可能性だってある。最大限警戒は怠らず中に入っていく。

「邪魔するぜ」

中は単車が並んでおり、煙草と排気ガスが混じった臭いで溢れていた。更にガラの悪い男と女が何人もこちらを見ていた。

ガレージの奥に進み誰もいない静かなスペースに着く。一台のバイクと三人掛けソファ、恐らくここが嶺雅のスペースなのだろう。

「で、何の用だよ」

着くや否や嶺雅はソファに座り込む。陣馬と或は立ったまままで座ることはしなかった。

「お前ら、最近色々悪さしてるらしいじゃねえか」

「はっ、今に始まったことじゃねえなあ。説教するために来たなら無駄足だぜ」

嶺雅は不敵な笑みを浮かべる。だが目は真つすぐ油断なく二人を見据えている。

「別にお前らがどうやろうと勝手だが……最近義乃んとここにちよっかいかけてるんだってな。それは俺としても見過ごせない」

「俺だってバカじゃねえ。踏み込んだじゃいけえラインくらいわかってるよ。ただまあどうも最近クサイんだよなあ」

嶺雅は考え込むように難しい表情をする。

「クサイ？」

「ここ最近、怪しいやつらが出入りしてる。ここだけじゃねえ、各区でだ。そいつらが各チームの動向を窺ってるらしいぜ。まさか……アンタじゃねえだろうな？」

「怪しい奴ら……？」

嶺雅は陣馬を睨みつけるも、陣馬にも心当たりがないのか考える素振りを見せる。

「その後ろの奴。アンタは弟子を取る主義なんてなかったはずだが？」

嶺雅は或を見る。その目はまるで物を見定めるような鋭い目だった。或は目を合わせぬよう俯いてやり過ごす。どうやら嶺雅は或を怪しい人物と関係があるのではと考えているようだ。

「コイツは無関係だ。その怪しい奴ってのはスモーカーズじゃないのか？」

スモーカーズ、或は茉奈に聞いた話を思い出す。チームの詳細は不明で目的もわからない。ただリーダーが或と同年代で中央区の汚れ仕事を請け負っていると噂が立っている謎のチームのことだ。嶺雅と陣馬は少なくともスモーカーズについて知っている口のようにだ。

「さあな。何が目的なのかは知らねえ。俺らの悪事を監視しているのか、それとも何かを狙

っているのか……。俺は圧倒的後者だと感じるがな」

「何にしてもだ、お前に用心しろとは言っても無駄だと思うが大きなトラブルだけは起こすな。それを言いに来たんだ」

「俺らは俺らの好きなようにやる。それだけだ」

嶺雅は手を払い「出ていけ」とサインを出した。陣馬はそれに答え振り向いて出入り口に向かう。

「行くぞ」

或は最後まで嶺雅と目を合わせず陣馬と共に部屋を出た。

アジトを後にし外に出る。恐らく外での仕事はこれで終わりのはずだ。

「……少し意外でした。愚連隊と聞いてたのもっと話の通じない相手だとばかり」

「嶺雅はああ見えて頭がいい。狡猾ってやつだな。悪知恵だけならアイツの右に出る人間はいないさ。それにお前にも目をつけていたみたいだしな」

或は先程、嶺雅から受けた鋭い目を思い出す。あの目はただ或を怪しんで見ているだけでなく、何か画策しているかのような、企てている目をしていった。

「あいつは争い事が好きだからな。あの程度釘を刺したところで止まる奴じゃあねえだろうがな」

陣馬は続ける。茉奈から争いや鬪ることが好きな人間だから関わるのはやめたほうがいいとは言われていたが対峙してその意味が分かった。

「そういえばなんですけど、義乃さんにも九頭竜さんにも言ってたトラブルって何なんですか？ 義乃さんは『迎え撃つ』とかどうとか……」

一通りついてきては見たものの、具体的に何のために釘を刺しているのか或はわからなかった。バッドとオウル間がひりついているのは先程報告書で見たがそれ以上のことは知らない。

「……抗争だよ」

「抗争？」

「そう。この街には四つのチームがあり、チームがあるのは自衛のため、つてのは聞いたな？」

「はい。茉奈に説明されました」

「各チームにもルールや線引きはある。各チームがそれを通そうとしたり、逆に線引きしたラインを相手が踏み越えてきたら？」

「……ぶつかる？」

「正解だ」

或でもわかるほどの簡単な問題だった。己の正義を突き通そうと思えば、他との衝突は避けられない。

「今回の場合は後者が近いだろう。何が原因かはわからないが何か発端があつてバッドの方からオウルに**喉(ルビ・けしか)**けた、と俺は見ているがな」

「……それで疑問なんですけど、それを止めるのが陣馬さんなのはなぜですか？」

「っ……さあな。知りたきゃ自分で調べろって言ったろ」

陣馬は何かを言いかけたようだったが、いつものように突き放す言い方をして先を進んでしまった。

「今日の仕事は終わりだ。夕方までに戻ってくれば勝手にしていいぞ」

陣馬は片手をひらひらと振り、或を見ることなく先に進んでいく。次第に見えなくなってしまうった。

或は、自分の手で抗争についてやチームについてをより深いところまで知るために、動き出す。

「うーん……無い、か」

或はその後、携帯の地図を頼りに異能街にある図書館に来ていた。異能街の図書館は、通常都市の図書館とは少し違う。本のほとんどが異能力や異能街の歴史についてで構成されているのだ。通常都市の場合、雑誌や漫画、小説に加え少しばかり異能力関係の本があるくらいだが、この図書館はそうではない。そのためこの図書館に来ることが街を知るのに一番なのだ。

だが或が探している「チームについてを深く知れる本」と「抗争について」の本はひとしきり探してみたがない。

「んん……自分で調べろつってもこれじゃなあ」

或は周りに聞こえない程度の小声で愚痴を漏らす。異能街に来たばかりでありツテもない或にとってこれ以上は知る方法が無い。茉奈に頼めば引き受けてくれるのだろうが、この間異能街についての説明してもらい、加えチームのこと、更にかんりの質問をしてしまったが為に茉奈には頼みづらいのだ。

「……もう少しだけ探してみるか」

或は再び本棚と向き合う。探している本に近い物から手に取っていき、机の上に広げる。そこから或はひたすら本に没頭した。

三十分ほど経っただろうか。未だひたすら本に没頭する或に、一人の男が近づいていた。

「よう」

男は図書館だということを気にすることなく或に声をかける。或もその声に反応して顔を上げる。そこには派手な金髪にピアスを付けた或と同じ年くらいの男が立っていた。

見た目だけで言えばバッドの事務所にいた連中に似ている。或は目を付けられたと思いい席を立ちあがって身構えた。

「……何か」

「おいおい、そんな警戒すんなよ。別に襲ったりしねえから。お前、鈴原或だろ？ 俺はオウル所属の龍川司(たつかわつかさ)だ」

オウル所属。それを聞いて少しだけ警戒を解くが、先程アジトに入った時の周りからの注

目を忘れてはいなかった。

「……」

「茉奈のやつがあまりに楽しそうに話すもんだからどんな奴かと思ってさ」

「茉奈……?」

なぜ彼、司から今茉奈の名前が出てくるのか、接触してきた理由が実は他にあるのではないかと思考を巡らせる或。その姿を見て、司は両手を上げた。

「そ。だからそんなに警戒するなよ。俺はアイツと通ってる学校が同じで、同じクラスなんだよ。面白そうに『無能力者と話した!』とか『陣馬さんの所で働いてるんだって!』とかいうからよ。お前だろ?」

「……まあ。でも何で俺だってわかったんだ?」

「ここじゃ見かけない顔だったし、それにさつき陣馬さんと事務所に来たろ? 俺も一応あの場にいたんだぜ。そんなに信用できなかつたら陣馬さんに聞きな」

オウルの間人であること、茉奈の友人であること、そして一応危害を加えることは無いという事で或は警戒を解いた。

「大方バッドんとこ行って警戒心が高まってたんだろ。それくらいわかってる」

「……悪かった。それで、何の用だ?」

「図書館に本返しとくようリーダーに言われてな。そのついでに見つけただけ。特にお前には用はないんだ」

司は或の隣の席に座る。或もこれといって話すことはないが、いい機会だ。先程から探していた本について、知りたいことについて聞くことができるかもしれない。

「……俺、つい昨日異能街に来てさ。まだこの街について何も知らないんだけど……」

「らしいな。初めて会った記念だ、俺に答えられることなら答えるぜ。……つっても茉奈の方がよっぽど詳しいけどな」

「茉奈の方が……?」

「ああ。チームの話は聞いたろ? 茉奈は渋谷の戌舞格闘倶楽部の副リーダーなんだぜ。だからアイツの方が街全体を見てるんじゃないか」

「茉奈が副リーダー!? それは初耳なんだが」

或は昨日、茉奈が渋谷のチームに所属していることだからしか知らされなかった。だから副リーダーを担当しているなんてことは知らなかったのだ。それにリーダーが兄でメンバーは門下生。門下生も認めているという点で茉奈が副リーダーということに驚きを隠せなかった。

「まあ自分から言うようなやつじゃあねえからな。んで、お前はここで何してんだ?」

司は机に置かれた大量の本を見て引きつった笑顔を見せていた。

「少し調べたいことがあったんだ」

「というと?」

「さつき陣馬さんとオウルとバッドのアジトに行ってきたんだ。それで、陣馬さんは抗争や

トラブルを起こさないためって言ってたけど……ぶっちゃけ、何で陣馬さんがそんなことをするのかわからないんだ。浅知恵だけど、異能街には中央区の治安部隊がいるんだろ？ それなのに何で陣馬さんが、って思ってたさ」

或は今調べてる一部の疑問を司にぶつける。すると司は難しそうな顔をした。

「んー……難しい話だな……。まず、治安部隊ってのは存在するが名ばかりだ。何があっても動くことなんてない。それは今に始まったことじゃないんだがな。だから治安部隊なんて頼りにならない。それどころか中央区自体、あまり信用は出来ないんだ」

「信用できない……？」

「そ。中央区のトップ、**神園統祇(ルビ・かみぞのとうぎ)**ってんだけど、どこから漏れた情報なのか神園はアメリカに復讐を誓っているらしい」

アメリカ。何度か学校の本で勉強した或にも知識があった。過去、日本とアメリカの間で異能力者を使った『異能力戦争』が起きた。それによって日本は敗北しアメリカからの支配を受けた。そして出来たのがこの異能街。ここまではどの本にも載ってる情報だ。当時の日本政府トップも神園という名前だったことを或は覚えていた。

「復讐……」

「この辺の情報はあまり**鵜呑(ルビ・うの)**みにはできないが……」

司は積まれている本を一冊手に取り、パラパラとページを捲る。

「ほら、これ」

司が指し示したページには、戦争で被った日本の状況が書かれていた。

『異能力者を一ヶ所に集約すべく異能街を創る』『異能街はアメリカの管理下にあり』……ん、でも今の異能街を管理してるのは中央区で、神園じゃないのか？」

「これは戦争終結時の話だ。戦争から十年くらいたった今は規制もだんだん緩くなってる。当時の話だと中央区のトップはアメリカの人間だったらしい。だが規制が緩くなるにつれ、神園がトップに変わったんだ。それと同時に現日本政府のトップ、首相が**神園源氏(るび・げんじ)**に変わったんだ」

「神園……？」

「そう。神園源氏は神園統祇の父親だ。ここから先は俺の推測だが、恐らくこの二人は何かを企**(ルビ・たくら)**んでる」

同時期に中央区のトップ、そして日本政府のトップが変わることなどあるのだろうか。或は考えてみるも、やはりまだわからない部分がたくさんある。

「企むって……いくら親子とは言え、事情を政界にまで持ち込めないだろう」

「それが可能なんだよ。中央区ってのは日本政府の一部なんだ。例えるなら政府という大きな括りがあって、その中に中央区が入ってるって感じだな。当然他にも色々存在するが、他の面々が賛同するなら二人の企ても遂行できるのさ。そしてさっきも言った『アメリカへの復讐』戦争時、日本のトップだったのは**神園雁庵(ルビ・がんあん)**。二人の先代に当たる人物だ」

司は本のページをさらに捲る。すると神園家の家計図が出てきた。雁庵は統祇から見た叔父、源氏から見た父に当たる人物になる。

「更に雁庵から源氏に首相が代わって間もなく、雁庵は暗殺されている。これは表面上病死となつているが暗殺つて方が確かみたいだな。雁庵に対して二人は恨みを抱いていたそう。厳しく育てられた父が敗北しアメリカに屈したからな。暗殺したのも二人が企てた計画だと俺は思つてる」

「なるほど……。でも、それが今の異能街とどう関係あるんだ？」

長々と話を聞いていたが、これは言つてしまえば神園家の内輪揉め。これが今の政界ならともかく、異能街にまで影響を及ぼすとは到底考えられなかった。

「まあ待て。もうひとつ同時期に起きた事件がある」

「事件？」

「戦争終結時、異能力者はこの街に集約されたことに腹を立てていた。そりゃ最初は何も無い荒廃した土地に放り込まれたんだ。差別だと感じる奴らもいただろう。そこで出来たのが『アンチ異能街』と呼ばれる集団だ」

アンチ異能街。聞きなれない単語だった。

「異能力者をこの街に閉じ込めることに差別だと感じる人ほとんどがこの団体に入った。そしてこの団体には陣馬さんも入っている」

「陣馬さんが……？」

或の中で、だんだんと点と点がつながっていく。

「アンチ異能街は中央区に訴えかけたそう。デモみたいなものだ。だがそれも功を成さず結果何も覆(ルビ・くつがえ)すことは出来なかった。だが重要なのはここからだ。アンチ異能街は諦めることなく活動を続けたが、異変が起きる。加入した能力者が消えていったんだ」

「消えたつて……。ここまで来ると政府からの介入としか……」

「そう。いなくなつた異能力者が見つかつたのは変わり果てた姿だったそう。異能力を失い衰弱(ルビ・すいじゃく)した状態。中には命を落としたやつもいたらしい。更にその消えた人間の中に、アンチ異能街の筆頭者もいたそう。頭がいなくなったことでアンチ異能街は霧散(ルビ・むさん)、政府に命を狙われないように身を隠す人間がほとんどだったらしい」

或は壮絶な過去に言葉が出てこなかった。ただの異能力者を集めた場所だとばかり思いこんでいたが、その背景にはたくさんの犠牲があつたこと、過去に陣馬が関係していたことなどたくさんの情報があつた。

或は流れるように入ってくる情報を頭で整理しつつ、理解していく。

「ここで最初の質問に戻る。なぜ陣馬さんが抗争やトラブルを起きないようにしているか。こればかりは陣馬さんしか本心を知らないが、中央区や政府は信頼に欠ける部分が多すぎるから、元アンチ異能街として相手の思惑(ルビ・おもわく)に乗らないように立ち回つているんじゃないのか？ もしかしたら陣馬さんは中央区や政府の企みが分かつてての行

動かもしれないしな」

陣馬が、昔と変わらざる異能力者の差別をなくすことを掲げているとしたら今日の行動も納得がいく。トラブルを起こすことが中央区の狙いなら陣馬も因縁のようなものがあった止めるのも筋が通っている。無論、それが真実とは限らないが。

「少し疑問に思ってたんだ。茉奈の話や陣馬さんの行動を見ると、どのチームにも一目を置かれて、それでいて信頼もされてるっていうか……」

「まあチームのリーダーや幹部連中は陣馬さんに恩があったり、良い関係を築いてたりするからな。だから凶暴なバッドでさえも陣馬さんには手を出さねえ」

「……なるほど」

「ま、今した話は俺の推測も交じってたりする。全部が正しいわけじゃあねえが俺が知っているのはこんな所だな。勉強になったろ」

「ああ。とても助かったよ。ありがとう」

「お前は見たとこ訳ありなんだろ。なら何かと知っておいた方がいいだろうしな。どうせ陣馬さんは教えてくれないだろ」

「……ついさっき自分で調べろって言われたよ。だからここにいたんだ」

調べて何もなかった時は無駄足だと思っただが、十分すぎる収穫があった。

「へえ。で、ほかに聞きたいことは？ お前も何か目的があるんだろ。役に立つかは知らんが情報協力ならやるぜ。警戒させちまったお詫びだ」

「お詫びなんてそんな……。じゃあ最後にひとつだけ、今オウルとバッドが揉めてるってことを聞いたんだが、それは何が原因なんだ？」

今の話を聞く限り、中央区や政府から仕掛けていることなら黒確定。零奈から送られてきた『両親の死に政府が絡んでいる』というのも真実になってしまふ。となるとやはり或は政府とぶつかるのを避けられない。無能力者の或にとってはリスクが大きすぎる話だが、それ以上に零奈を取り戻したいという気持ちや或を動かしている。

「……実のところな、俺もなかが火種になったのかわからないんだ。何かトラブルがあったって情報も入ってない。だからこそさっきの政府が絡んでくるって話が現実味を帯びてくる。それに俺らだけじゃない。ここ最近の異能街はどうもおかしい」

「おかしい？」

嶺雅も似たようなことを言っていたことを思い出す。『怪しい奴らが出入りしてる』と言っていた。

「新宿のチーム、スモーカーズは知ってるか？」

「なんとなくは。素性(ルビ・すじょう)が分からないチームで、汚れ仕事を請け負ってるって噂の……」

「そのスモーカーズが最近いなくなったって話だ。それにチーム無所属の能力者が襲われるって事件も多発してる。俺もそんなに長くここにいるわけじゃないが、ここ最近は誰でも異変を感じ取れるくらいにおかしい」

先ほどバッドのアジトに行った時に陣馬と嶺雅が話していた。或はここにきて日が浅い
が何か良くないことが起こるかもしれないと感じてしまう。

「少しは逸れたが……俺もわからないってのが本音だな。だからこそこのまま**有耶無耶**(ル
ビ・ウヤむや)に終わるかもしれないし、もっと大きなことに発展するかもしれない。後者
の可能性をつぶすためにも陣馬さんが動いてるんだろうさ」

司が知らないということは他も知らないのだろうか。それについても知りたいと思った
が、流石にこればかりは或が自分から関わってもいい話ではないだろう。

「ふむ……なるほど」

「お前は頭で考えてから行動する理性的なタイプだろ。ならよく考えて動いてみれば案外
うまくいくぜ。この街では能力が強いやつが生き残るんじゃない。賢く、上手く立ち回れる
やつが生き残るからな。陣馬さんみたいに」

司が言い終えると同時に、図書館内にチャイム音が響いた。

『午後五時をお知らせします。当館は間もなく閉館いたします。ご利用ありがとうございます
ました』

閉館の合図だった。気が付けば外は夕陽が見え始め、随分長い時間居座ってしまったら
し。

「ん、俺らもそろそろ行かなきゃな。片付け、手伝うぜ」

「ああ、ありがとう」

二人は机の上に積まれた大量の本を本棚に戻し始めた。

ここまで知れるとは思っていなかった或。夕方まで戻るよう陣馬に言われているが間に
合おうだろう。事務所に帰ってから今日聞いた話を踏まえてもう一度陣馬に話を聞いてみよ
うと考えた。

片付けも終わり、二人は外に出る。

「今日はいきなり声かけて悪かったな」

「いや、俺も色々教えてもらったし。こっちこそ悪かったな。ありがとう」

「おうよ。またなんかあったら連絡してくれよ。力になるぜ。どうもこう話せる人間はこの
街にいないみたいだからな」

司は或を気に入ったようで、電話番号の書いた紙を渡す。

「じゃあまたな」

「おう」

二人は図書館の前で各々帰路に着いた。

「ただいま戻りました……」

或が事務所に帰ると、中には明かりがついていたが陣馬はいなかった。奥のプライベート
ルームにいるかと思えばプライベートルームを開ける。

「陣馬さーん……」

中を覗くと陣馬は何やらパソコンでの書類仕事に熱中しているようだった。或の声にも気づかない様子。或は中に入って肩を叩く。

「帰りましたよ」

「んっ……なんだお前か。帰ったんなら一言くらい声かけろよ」

「かけましたよ。陣馬さんが気が付かなかっただけです」

陣馬はパソコンのモニターを閉じる。

「結構遅かったな。調べものはうまくいったか？」

「ええまあ。オウルの司って人に声かけられて」

「司か。お前も運がいいな。で、どうだった」

「政府や中央区について教えてもらいました。結構深いところまで」

或がそう報告すると、陣馬は眉をピクツと動かす。

「……なら自分でも何か繋がった点があるんじゃないか？ お前の探し人について」

「……零奈の両親についてですかね。戦争終結後『アンチ異能街』の団体から姿を消した人の中に零奈の両親がいたんじゃないか……って。もしそれに政府が加入しているのなら零奈から送られてきた『両親の死に政府が関わっていた』っていうのも辻褄(ルビ・つじつま)が合うんですね」

俯きながら話す或に、陣馬は表情一つ変えず言う。

「大体正解だな。アンチ異能街を知ってるってことは俺がその団体に入ってたってことも聞いたんだろ？ ならひとつヒントをくれてやる。確かにアンチ異能街の中には零奈の両親がいた。俺は話したこともあるしな」

「っ！ ホントですか!？」

陣馬から出てきたのは思わぬ言葉だった。

「ああ。まあこれ以上は自分で調べるんだな。答え合わせくらいならしてやるからよ。……じゃあ俺は引き続き仕事するから。出てけ」

陣馬は部屋から出るよう手を祓う。

「いや、ちょっと。でもそれって……」

「いいから出てけよ。あ、表の戸締りだけはしといてくれ」

聞く耳を持ちそうにない陣馬に或は諦めて部屋の外に出た。或は仕方なくソファに座る。

「……じゃあ零奈の敵は政府と中央区確定……。じゃあ、その零奈は今どこに……？」

敵を見つけた所で、零奈自身がどこに居るのかわからなければ探しようがない。ここで、司に聞いたある情報を思い出す。

『最近異能街はおかしい』『新宿のスモーカーズがいなくなった』『チーム無所属の能力者が襲われている』

「……スモーカーズか？」

茉奈も司もスモーカーズに関しては情報がわからないと言っていた。チームの副リーダーである茉奈がわからないと知っていることから、あまり情報を知っている人間はいない

と見える。ならここでひとつの憶測が立つ。

『スモーカーズなら、素性をバラしたくない零奈が隠れるのに最適』

スモーカーズに所属していれば目的や素性をバラすことなく異能街に潜伏できる。それに噂であれスモーカーズは政府からの汚れ仕事を請け負っている。唯一チームの中で中央区と直接関わりを持っているからこそ、零奈は復讐の目的を果たすために機会をうかがっているのではないかと読むことができる。それに加え、能力者を襲う事件。これも中央区からの指示でスモーカーズがやっているのだとしたら、全てに合点が行く。だがこれは根も葉もない噂を当てがった上に憶測を重ねている。こう都合の良いことあるのだろうか。

「もう一回、整理しよう」

或は、陣馬に頼まれていた戸締りをしてから机にノートとペンを広げる。一度整理してから考えようと思いを巡らせた。

三 衝突

「鈴原(ルビ・すずはら)、起きろ」

「んむ……」

或(ルビ・ある)は寝ぼけ眼を開くと目の前に険しい顔をした陣馬(ルビ・じんば)が覗き込んでいた。

「おはようございます……」

「急いで支度をしろ。外に出る」

陣馬も慌てて支度をしているようで、その様子はいつもの陣馬とは思えないほど忙しかった。

「どうしたんです……? こんな朝から……」

時刻は朝八時。最近動き回っている或にとつて、まだ眠い時間だ。

「オウルとバッドが衝突したって情報が入った。……ちくしょう、なんだって翌日に……」

「……えっ、それって……」

「ぼさつとしてんな。行くぞ」

衝突。つまり抗争が始まったということだ。つい昨日両チームに釘を刺しに動いたばかりなのに、と或は昨日の事を思い返す。何が引き金なのか、政府が介入しているのか。準備をしながら或は思考を巡らせる。それに陣馬の焦りようを見るに陣馬にとつても予想外だったようだ。二人は急いで準備を終え、事務所を出た。

外に出ると、いつもより騒がしい様子だった。探偵事務所は入管近くのエリアに立っているが、そこでもざわめきが聞こえるくらいだ。そして少し離れた場所からは黒煙が上がっている。その方向はつい昨日行った池袋の方面だった。

「走れ！」

二人は昨日も歩いた道を走り抜けた。

「準備はいいなア？ お前ら」

「「おおー!!」」

眼の前にかかる黒煙を見ながら、嬉々とした表情で九頭竜嶺雅（ルビ・くずりゆうりょう）は、池袋のオウルアジトの前にいた。五十人近くの部下たちを全員集め武装、そして攻撃していた。既に何本かの火炎瓶が放り込まれたオウルアジトからは火災報知器のサイレンが鳴り、あたりをより一層騒ぎ立てる。

「まさかこんなに早く始まるとは思っていなかったが……まあいい」

嶺雅はにやりと口角を上げる。

「殺せええええ!!」

嶺雅が叫ぶと、建物を取り囲んでいた部下たちが一斉に中に入り込んでいく。

「クソフクロウどもが。飛べないように羽を挽いでやるよ」

嶺雅や部下は皆、不敵な笑みを浮かべている。ある程度部下が中に入ったことを確認すると、嶺雅も中に入っていく。

やがて五階建てのマンションは人が溢れる。中からは叫び声や不気味な笑い声がかたもかというほど漏れてきた。

「九頭竜、テメエ……」

内部、嶺雅を止めるべくオウルの部下たち三人が嶺雅と対峙する。綺麗に手入れされていたフロアは、どこも荒され至る所に投げ込まれた火炎瓶による火が上がっている。

「お前らじゃ俺の相手は荷が重いぜ？」

「言ってる！」

するとオウル部下の手から炎が放たれる。更にそれに合わせるようにサイドから攻撃を仕掛ける。異能力を使ってでも嶺雅を止めるつもりなのだ。

「うるせえなあ……」

攻撃が嶺雅に当たる瞬間、嶺雅の姿が消えた。囲んでいた全員が辺りを警戒すると、先程炎を放った男の後ろに立っていた。

「ばあっ！」

嶺雅は後ろから男の腕を掴み後ろに回す。そして男の腕関節めがけて膝を入れる。

「ッ！ があああああ！」

ゴリつと骨が碎ける音と共に、男は倒れ込む。更に倒れ込んだ男の顔めがけて蹴りを一発。これが嶺雅の異能力『死角移動』姿を消し対象の死角に現れる。

「ひっ……」

その様子を見た他の男たちはイカれた行動に後ずさりしてしまふ。

「おいおい、なにビビってんだよ。始まったばかりだぜ」

更に嶺雅は姿を消し別の男の後ろへ。そのまま落ちていた鉄パイプで頭を殴りつける。

「やっぱこんな下っ端じゃつまんねえなあ」

嶺雅はポケットから小型ナイフを取り出す。最後の一人を倒すべく、嶺雅は再び姿を消し死角から現れナイフで切りつける。また消え、現れて切る。その繰り返しだ。

やがて最後の一人も意識を失い、嶺雅の邪魔をする者はいなくなった。

「……やっぱ討つなら大将首だろ」

嶺雅は倒れている男達には目もくれず、階段で上の階に上がっていく。

最上階が近くなる階段で、とある異変に気が付く。階段や部屋の中でバッドの部下ほとんどが倒れているのだ。その倒れた部下たちの先にいたのは。

「久しぶりだなあ、義乃(ルビ・よしの)。準備運動は済んだか？」

「はあっ……はあっ……嶺雅ッ！」

最上階の部屋の真ん中で刀を持ち、息を荒げた義乃だった。

「物騒な物持ってるなあオイ。アンタも大概だぜ」

「……あなたと一緒にしないでください。これは模造刀ですよ。私はあなたのように人をいたぶる趣味は持ち合わせていませんので」

辺りに倒れている部下たちからは、血の一滴も流れていない。恐らく気絶させられているのだ。

「知るかっーのっ！」

嶺雅は義乃の背後に回り込み蹴りを入れる。だが義乃はこれを振り返り様子模造刀でガード。反射神経だけで死角からの攻撃を回避した義乃。

「このっ！」

流れるまま模造刀で嶺雅の腹部めがけて突く。

「はっ！」

嶺雅は両手でガード。一度お互い距離を取る。

「能力を使ってもいいんだぜ？」

「私が決めることです……はあっ！」

義乃は刀を構え嶺雅に仕掛ける。嶺雅は能力で死角に回りながら反撃を行うが反射神経の差で義乃が上回りそれを防ぐ。まさに一進一退の攻防だ。

「仕方ねえ。俺もちよつとばかり本気を出してやる」

その言葉を発した途端、また嶺雅の姿が消える。再び死角から現れた嶺雅に義乃は反応するも、すぐさま姿が消える。次に現れたのはその更に背後。フェイントだ。それにかかってしまった義乃は反応するも体がついていかず防ぐことが出来ない。

「おらよっ！」

腹部に膝蹴りを一発。もろに喰らった義乃は後方に飛ばされてしまう。倒れ込むも、刀を杖代わりにして立ち上がる。

「ぐっ……」

「おいおい。まさかもう終わりじゃねえだろうなあ？」

息一つ上がっていない嶺雅を義乃は睨みつける。いくら反射神経が良くても、戦闘慣れた嶺雅が上回ってしまう。

「ちょっとしか本気出してねえのによー。まあいいや、死ね」

義乃に近づき、立っているのもやっとな状態の義乃を見下す。再びポケットから小型のナイフを取り出し義乃の顔めがけて振り下ろした。

「っ！」

ダメージを受けて動けない義乃。覚悟を決めて目を瞑るも、身体に痛みは走らなかった。義乃の顔に液体が付着し、義乃が目を開けるとそこには庇う形で司が立っていた。

「ぐっ……」

ナイフが肩にかすり、その血が義乃の顔に付着していたのだ。

「司！」

「……おらっ！」

司は嶺雅の手を被い蹴り付ける。大したダメージではないが、嶺雅は後ろに下がった。

「かつこいいねえ。身代わりなんてさあ」

「うっせえ……。大丈夫ですか、義乃さん」

少し血が出ている肩を抑えながら、反対側の肩を義乃に貸す。

「私は大丈夫です。でもあなたが……」

「俺のことはいいから！ まずはアイツを……」

既に司の顔や身体には無数の傷が。下のフロアで下っ端と戦ってきたのだろう。

「そんな満身創痍(ルビ・まんしんそうい)で俺を倒せると？ 義乃一人でも歯が立たねえの？ 見た目だけじゃなく頭までバカなのか」

挑発を行うも、二人は嶺雅と対峙し睨みつける。その姿勢を見て、嶺雅は再び口角を上げた。

「そうかそうか、じゃあ……一回死んで反省しろ」

嶺雅は、もう一本ナイフを取り出し二人に切りかかる。その狙いは定まっておらず、雑な攻撃だ。だがどちらに当たっても致命傷は免れない。

「仕方ないですね……。はあああっ！」

降りかかる寸前、義乃は模造刀で嶺雅に触れる。攻撃したわけではなく、ただ本当に触れただけ。そのまま刀先を少しばかり上にあげる。

「あ？ ちっ」

すると、嶺雅の身体がいとも軽く宙に舞い上がった。そしてどういう原理か、嶺雅は中にながったまま落ちてこない。まるで風船のようだ。

「やっと思ったか、異能力」

特に驚く様子もなく、嶺雅はじっと二人を見つめる。

「本来使うつもりはありませんでしたが……やむを得ません」

義乃の異能力『重力操作』は対象にかかる重力を自在に変えることが出来る。だが条件として対象に触れなければならない。義乃は嶺雅にかかる重力を打ち消し、無重力状態にした。だから刀先で上にあげた時に嶺雅の身体は浮き上がった。解除するか新たに重力を変えない限り嶺雅はこの状態のままだ。

「……使い勝手が良いのか悪いのか……ただまあ俺の前では無力だけどなあー！」

宙に浮いたままの嶺雅の姿が消え、二人の死角に現れる。この時点で無重力状態は解除されている。異能力同士は干渉しあうため、能力が上書きされたのだ。背後に回った嶺雅はすかさず攻撃を行うが、僅かに義乃が早かった。死角を読んでいたのか、嶺雅が現れる前に攻撃に入る構えをしていた。そして現れた途端、嶺雅の腹部を模造刀で突く。

「がっ……」

義乃の能力で無重力状態の嶺雅は、そのまま後方に飛んでいき窓を破り外に出てしまう。「司、動ける人員を外に回してください。怪我をした人たちは一か所に集めて置いて。私は彼を追います」

義乃はフラフラな状態で部屋を出ていく。階段を下りていき外に出ると、けろっとした嶺雅が待ち構えていた。

「五階から落ちても無傷とは……人間とは思えませんね。元々人間とは思ってないですが」「こんくらい屁でもねえ。さあて、邪魔者もいなくなったしもう一回やろうか」

二人が戦闘体勢に入ったその時、辺りに大声が響いた。

「その辺にしておけ！ お前ら」

二人の間に割って入ってきたのは、陣馬だった。後ろには或の姿もある。その声に反応した二人は、陣馬に目をやる。

「邪魔すんじゃないよ。もう決着付くんだからよ」

口ではそういうつつも、陣馬の前で争うつもりはないようでどちらも戦闘態勢を解く。

「待って待て。昨日言ったハズだぜ、トラブルは起こすなって。それが昨日の今日でどういう訳だ？ 何が原因でこれに至った？」

元よりひりついてはいたが、陣馬が釘を刺していた。にも関わらずこうして戦いの火蓋が切って落とされてしまった。その理由を陣馬や或は知らない。

「昨日の深夜、私たち部下が何者かに襲撃を受けました。それを知ったのは今朝ですが、同時にバッドが攻め込んできたので迎撃態勢に……」

「残念ながら同じだ。だからその状況を楽しもうと思って来てやったってわけ」

双方意見が一緒だ。だがこれを聞いた陣馬が違和感を感じたようで言及する。

「襲撃されたのは互いの部下なんだな。誰にやられたのかは確認したのか？」

「いえ、襲われた部下が重傷なのでそこまでは。ですが恐らく……」

「コイツじゃない、つてわかってんだな。なら良い。じゃあ嶺雅、何でこんな時に攻め入った？ お前だつてわかってたんじゃないのか？」

すると嶺雅は勿論だと言わん場明かりの顔をした。

「こんな時だからだろうが。誰かが意図的に仕組んだものだとしても、これに乗じて戦うことが出来るなら本望だぜ。戦いは楽しむもんだろ」

狂気的な笑顔を見せる嶺雅。陣馬はそれを見ても表情を変えることは無い。

「第一、誰かの掌で踊らされたとしてもそいつごとぶち殺せば済む話だからな。俺は今の状況を楽しむだけよ」

「……ったく。これは言うか迷ったが……もしかしたらこの抗争に、政府絡んでいるかもしれない」

「……政府？」

「ああ。まだ確定段階じゃないから話すか悩んだが……。どうもここ最近は何能街で事件が多発しすぎて。今回の抗争もそうだ。互いの部下が襲われたのに誰かわからないなんて普通はあり得ないだろ。政府が何か良からぬ動きをしているかもしれない」

「確かに……そう考えれば辻褄が合いますが……」

「まだ確定には至ってないんだろうが。その話を信じてここは退(ルビ・ひ)いてくれつつは無理があるんじゃないか」

未だ好戦的で退く気がない様子 of 嶺雅。だが先ほどよりも落ち着いているようで冷静に話し合いに参加する。

「だから言うか迷ったんだよ。まあこれをどう捉えるかはお前たち次第だ。俺を信じるか信じないかもな。ただ一旦、俺に免じてここは終いにしてくれねえか？」

或はただ見ていることしかできなかったが、ここで大人しく嶺雅が退くと思えなかった。

「はあ……仕方ねえ。そういわれちゃ俺も断れないわな」

少し悩んだ末に嶺雅は撤退の意思を表した。或自身驚いてしまったものの、他の面子はそうでもないらしい。やはり陣馬の『俺に免じて』というワードがあったからだろうか。

「お前ら。先帰ってろ」

嶺雅は撤退の合図を出す。

「みなさんも。怪我をしている者は病院へ。動けるメンバーでサポートしなさい。いいですね？」

義乃も部下たちに解散するよう伝える。すると暫くしてから場に残ったのは陣馬と或、嶺雅、義乃の四人になった。周りにはまだ少しガヤがいる。

「で、仮に政府が仕組んだ毘だったとして、今お互いが退いたところで何も先には進まない。何か考えはあるのか？ 無いなら俺らは中央区に殴り込みに行く」

「ダメだ。まだ具体的な策はないが、先ほど言った多発している事件。その調査をしてから動こうと思っていた」

「打倒でしょうね。今策も無しに突撃するのは愚者(ルビ・ぐしゃ)のやることです」

「ああ？ テメエまだやられ足りねえ見たいだな。殺してやろうか？」

愚者、という言葉に反応する嶺雅。そして二人は再び睨み合う。

「やめとけ。だが中央区に関して言えることは、近々あっちの方から声明が出る。それまで

待つのが賢明だろう」

「なんでそれがわかるのですか？」

「中央区にモグリがいる。そいつからの情報だ。信用できるツテだからこれだけは確定事項だ」

まさか、とは思っていたがやはり陣馬はどこにでもスパイを潜らせているようだ。或にも心当たりがあった。探偵事務所に来た初日、陣馬は『局員に頼んで特別許可してもらった』と長期滞在の許可証を貰っていた。その時から薄々感じてはいたが、入管や中央区にスパイがいるのだろうか。もしかしたら政府関係者にもいるかもしれない。改めて、陣馬を侮れないと感じた。

「じゃあ一旦それまで待つ。その内容次第で俺は動くかどうか決めることにするぜ」

「では私も待つとします。ですが私から動くとは思いませんので、また何かあったら連絡させていただきます」

「じゃあ今日の所は解散だ。駆けつけるのが遅くなってすまなかった」

なぜ陣馬が謝るのだろうか、と或は思ったが陣馬も陣馬なりに責任を感じているのだろう。

「いえ。それでは私はこれで。病院に言った者たちの様子を見に行ってきます」

義乃が先に背を向け歩いて行った。嶺雅は何も言わず足立方面へと足を運ぶ。次第に二人の姿は見えなくなり、終結した。

「はあ……つたく、好き勝手やってくれやがって」

陣馬は未だ黒煙が立つアジトを見ながらため息をついた。

「わかったか鈴原。これが俺が起こさないよう釘を刺してた抗争ってやつだ。恐らく今回は死者はいないだろうが、過去の戦争では何十万という数の死者が出た」

「わざわざアジトまで出向いた意味がわかりました……。でもどうして抗争が起きてるって知ってたんですか？」

「さっきも言ったモグリからの連絡だよ。『抗争に発展した』って連絡を受けたんだ。それより、先に事務所帰ってる。それで朝の業務と、一応**茉奈(ルビ・まな)**にも連絡しとけ。俺はまだやることあるからな」

アジトを指さし苦い顔をする。恐らくここの後処理をするのだろう。

「わかりました」

或は陣馬から事務所の鍵を受け取り帰っていく。時刻はお昼前。随分と騒がしい始まりになってしまった。陣馬は煙草に火をつけ空を見上げる。その視界には、天を裂くように高いビルが映っていた。

「失礼します」

同時刻、首相官邸にてスーツ姿の男が部屋に入る。部屋の中には書類仕事をしている少し老けた顔の男が一人。

「どうだった」

「先の池袋と足立の抗争は終結したようです。データを取ることに成功しました。どうやら場を収めたのは一般人と報告が入っています」

「そうか……。恐らくその一般人は陣馬慶真(ルビ・けいしん)だろうな。しかしデータが取れたのなら良い。計画の方は？」

「そちらも依然順調です。近いうちに実行に移すことも可能でしょう」

「では近いうちに出す声明は統祇(ルビ・とうぎ)、お前に任せる」

統祇、と呼ばれた男は深々と頭を下げる。

「承知しました。お父様」

この二人こそ、現日本首相、神園源氏(ルビ・かみぞの げんじ)と中央区トップ、神園統祇だ。

「ぬかるなよ」

「勿論です。そして報告することがもうひとつ。……入りなさい」

統祇は扉の方に声を掛ける。すると中に入ってきたのは小柄な女性だった。女性は源氏に向かつて一礼。

「彼女は新宿のチーム、スモーカーズのリーダー麻宮霧(ルビ・あさみやきり)です」

「初めまして、麻宮です。この度、統祇様のご命令により本計画に加担することとなりました。以後、お見知りおきを」

「新宿……姿を消したとの報告が上がっているが」

源氏は机の上にある報告書に目を通す。そこには『スモーカーズ、行方を眩ませる』と書かれている。

「此度(ルビ・こたび)の計画のために、鳴りを潜めておりました。選別の件は、既に統祇様より」

「そうかそうか。ではこちらからも何人か出すとしよう。自由に使ってくれて構わない」

源氏は立ち上がり、窓の付近に立つ。外の景色を見ながらニヤリと笑う。

「選別を始めるとしよう。その先に待つ変革と、勝利のために」

その笑顔は、そこが知れない不気味な雰囲気を漂わせていた。

源氏を見つめる統祇は悦びの顔を、霧はその二人を無表情のままただ眺めていた。

四 選別

オウルとバッドの抗争から数日後、再び平和な日常を取り戻した異能街。あれから大きな争いは起きなくなり、或(ルビ・ある)も雑務をこなしながら零奈(ルビ・れいな)について調べていた。だが何も進展はなし。陣馬(ルビ・じんば)は調査をしてきているのか、こちら

も特に何も言われていない。

いつものように或が朝の業務をこなしていると、プライベートルームから出てきた陣馬がいう。

「鈴原（ルビ・すずはら）。お前の探してる零奈についてだが……」

陣馬の口から出た台詞に、或は少し驚いてしまった。本当に調査してくれていたんだ、という安心感と、零奈の名前が出てきたことに咄嗟に反応してしまう。

「なにかわかったんですか!？」

「わかった、というよりは俺の推測だ。零奈は恐らく、どこかのチームに身を隠している」

「隠して……。俺もその線は考えました。一番可能性として挙げられるのはスモーカーズだと思ってる」

スモーカーズは素性も何もわからない謎のチーム。そこに身を隠すのが最適解だと或は依然考えたことがあった。

「まあだろうな。だがそのスモーカーズも姿を消してる今、これは確かめようがない。だが確実なのは、中央区や政府への復讐の期を狙っている。だからお前も声をかけるなら慎重になれ」

「慎重になって……. いったい」

そう聞くと、陣馬は手に持っていた一枚の紙を或に見せる。

「また報告書ですか」

「俺の協力者は優秀だからな。何か変化があればマメに送ってくれるんだ」

或はその紙を覗く。するとそこには簡潔に『異能街に政府・中央区の関係者が多数出入りしている』と書かれている。

「……関係者って、まさか」

「やはり俺の予想は当たってたらしいな。政府は中央区と組んで何かを企てている。その何かがいづまでもわからないのが歯がゆいが……。前兆と読んでいいだろう。前に言った能力者襲撃の事件も数は減っていない。何かが起こる前兆だろうな」

「政府ないしは中央区からの声明っていうのも近いうちに出るんでしょうか」

「だろうな。何をやりだすかは知らねえが……。そこで、お前も零奈の情報を集めるのに慎重になれと言ったのはこれも絡んでいる。外は政府や中央区の人間が出入りしている。いつ誰がどこで聞いているのかわからないから外で零奈について聞くのはやめておけ。そしてここからは単独で外に出るのも極力控えろ。いいな？」

確かに、と或は納得するも、それで零奈のことが調べられなくなったら元も子もない。

「でも、それじゃあ結局わからないままになって零奈を見つけることが出来ません。どうしたら……」

「しないとは言っていない。俺もお前も慎重になれって話だ。いいな？」

「……はい」

一通り話し終わったタイミングで、事務所の扉が開いた。

「陣馬さん！」

中に入ってきたのは陣馬と同じ年くらいの男性。慌てた様子で事務所に入る。

「おう。悪いなわざわざ。どうしたんだ、そんなに慌てて」

「テレビをつけてください！ 政府の会見が始まりました！」

その言葉を聞いた陣馬は事務所にあったテレビをつける。唐突でゲリラではあるが、テレビを付けてみると本当に会見が始まっていた。

『中央区の代表、**神園統祇(ルビ・かみぞのとうぎ)**です。今回、急ではありますが会見を開かせていただきました』

テレビに映る若い男性。年齢は二十代後半くらいだろうか。黒のスーツに身を包み手元の資料を見ながら淡々と話す。この男こそ以前から話を聞いていた神園統祇だ。或は本人を見るのが初めてではあるが、あまり良い印象はうけない。

『今回、私たち中央区は日本政府協力の元、異能街についてとある政策を実行することを決定いたしました。その政策とは……『選別』です』

「選別……だと？」

それを見た陣馬が一気に険しい表情に変わる。

『選別とは、異能街に住む人間の身体に宿る『異能力』についての政策です。調査によると、この異能力というのは凡なものから危険すぎるものまで、レベル別で分ければ細かになるほど大量の能力が存在するのです。特に異能街に存在する『チーム』。ここには特に危険な能力が集まっているとの報告が上がっています。私たち中央区はこれ危険分子と判断し、本人同意のもと私たちの管理下に置くことにしました。これが『選別』です』

この放送は恐らく、異能街の人間の大半が見ている。それこそチームに所属している人間は気が気じゃないだろう。

『そしてこれと同時に、異能力の研究を更に進めたいと考えています。つきましては、対象となった能力者には快くお引き受けくださるよう、お願い致します。もし、反発し武力行使も必要と判断した場合、武力、及び我々の協力者である能力者の行使も視野に入れておりますので、各自懸命な判断をよろしくお願い致します』

顔色一つ変えずに淡々と話す統祇。その内容は、無能力者の或でも横暴すぎると感じるほどのものだった。

「陣馬さん、これって……」

「ああ……いきなり動き出しやがったな」

『そして最後に一つ、この政策には日本政府協力の元、と言いましたがそれ以外にも協力を要請しています。一例を出すと、新宿のチーム『スモーカーズ』の面々。彼らのバックアップもありこの政策は始まります。再三に渡るようですが、各自懸命なご判断をお願い致します。以上で会見を終了いたします。この件に関してのご意見、批判等は一切受け付けておりませんのでご了承ください』

統祇が礼をして会見が終了する。テレビは画面が切り替わりニュース速報に切り替わっ

た。

「選別……」

「大方強力で危険な能力を集めてアメリカに再戦しようと**目論**(ルビ・もくろ)んでいるんだろうな。そして協力しなければ武力を使っても従わせる。これは中央区から各チームへの宣戦布告のようなものだ」

その場にいた三人は啞然としてしまった。今の会見が明らかにおかしかったのは誰の目から見ても明らかだが、それでもこの強硬姿勢。日本政府も絡んでいることから、これはかなり危険な政策になると或は感じた。

「何かの冗談じゃ……」

「冗談でこんなことしねえだろ。異能力についての研究つてのも人体実験のようなものだろうな。選ばれた人間は引き受けても地獄、引き受けなくても強制的に従わせられ地獄。これはマズイな……」

「陣馬さん。手を打つならやはり早いほうが」

「だな。これを頼む。手筈通りにな」

陣馬は男に一枚の封筒を手渡す。男はそれを受け取ると頷き、すぐに出ていった。

「今の方は？」

「中央区のモグリだ。こっちの仕事を頼んでたんだが……そうも言つてられないみたいだな。よりにもよつてスモーカーズがあつちに付きやがつた。ここ最近姿を眩ませていたと思つたら中央区側に付いたか」

「他の三チームは、従いますかね」

或の頭に茉奈、**義乃**(ルビ・よしの)、**嶺雅**(ルビ・りょうが)の顔がよぎる。

「会見では危険な能力を集めると言っていたがあれは嘘だろうな。選別とやらの政策を無理に通すために先にチームを潰すつもりだ。どうせあいつらは従わず反発する。それを潰すという宣言でもある。……どう動くか」

陣馬は今までにないほどの険しい表情で考え込む。その横顔は宛ら探偵そのものだった。

「ひとまず様子を見よう。俺は一度外に出るがお前はここにいろ。いいか、誰が来ても絶対にここを開けるなよ。もしかしたら今日中には帰れないかもしれない。俺は前からだがお前も恐らく中央区に素性がバレている。接触してくる可能性も無くはない。何かあつたら連絡しろ、俺の方からも何かあれば連絡する」

「わかりました」

陣馬はすぐに支度をして事務所を出た。今までにないくらい口数が多く、焦っている様子の陣馬を見て或も一筋縄ではいかない話だと理解できた。

「異能街は、大丈夫なのか……」

事務所の窓から見える景色が明日も同じ景色だとは限らない。或は何もできない自分を呪うことしかできなかつた。

※ ※ ※

結局三日立っても陣馬が帰ってくることは無く、或は不安に駆られながら事務所で待つことしかできなかった。茉奈や司には連絡してみたものの音沙汰なし。恐らく選別に巻き込まれているのだろう。そして変化があったのは窓から見える景色。

異能街と通常都市を繋ぐ関門から、重機や運搬用の大型車などが頻繁に出入りするようになった。そして至る所で轟音が響き事務所まで聞こえてくる。やがて土煙が上がり静かになる。最近この繰り返しだ。場所的には各チームのアジトがあった場所から煙が上がる。今頃はどうなっているのか、各チームの面々は無事なのか。それすらもわからない状況だった。テレビを付けても先の会見や政策についてで持ち切り。まさに大変革が行われていた。

「何か、出来ることは……」

この三日間、同じようなことを考えては思いつかずの繰り返し。結局この部屋の中でできることなんてない。またいつものように何もできないと諦めたその時、或の携帯がなった。連絡先は知らない番号。或は恐る恐る電話に出た。

「……もしもし」

『鈴原、生きてるか』

「っ！」

電話口の向こうから聞こえたのは、聞き慣れた男性の声。陣馬だ。

「陣馬さん！」

『そっちは大丈夫か？』

「はい。事務所は何事もないですが……外が」

『みたいだな。鈴原、頼みがある。これから指定する場所に向かってくれ。そこに各チームのリーダーや幹部が集まる。そこに向いてほしい』

各チーム、ということは義乃に嶺雅、それに未だ会ったことのない**樂兜(ルビ・がくと)**、もしかしたら司や茉奈もいるかもしれない。

「わかりました！ 陣馬さんは行かないんですか？」

『俺の方はまだ掛かりそうだからよ。そっちはお前に任せるわ。場所は足立のバッドアジトだ。どんな話し合いをして、どんな結果を出したのかだけ逐一連絡をくれ。そしてもう一つ。事務所を出る前に俺のプライベートルームにある書類を全て室内の金庫に入れてくれ。一度金庫を閉じれば勝手にロックがかかるシステムだ。一枚残さず全部入れろ、いいな？』
とても的確でわかりやすい指示。或は電話をつないだままプライベートルームで作業に取り掛かる。室内に入ると膨大な量の書類があるが、片っ端から片付けていく。

「陣馬さんはいつ戻ってくるんですか？」

『わからねえ。近いうち一度事務所には戻るが……そこからは状況次第ってとこだな』

「ちなみに今はどちらに？」

『異能街の中やら外を動き回ってる。そこで色んな人に声をかけている。会ってからまた詳

しい話をするが……桐谷零奈とも会ってきた』

「えっ!？」

或は、驚きのあまり手を止めてしまう。

「本当ですか!? 零奈は今どこに……」

『まだ俺も零奈と詳しい話は出来ていない。だが彼女も反政府として反撃の機会を窺っていたそう。もしその意思が変わらなかつたら近々お前とも会えるだろうさ。だからその時に本人の口から聞け』

或は、零奈が見つかったことへの安堵と驚きで感情がごちゃごちゃになっていた。

『彼女に会うためにも、今は目の前のことに集中しろ。いいな?』

「……はいっ!」

いつの間に目尻に溜まっていた涙を拭い、返事をする。

『じゃあ頼んだぞ』

そういうと陣馬の方から電話を切ってしまった。

「また、零奈に会える……っ!」

胸の高鳴りを抑え込むことが出来ず、口に出してしまふ。やはり陣馬は裏で調査してくれていたのだ。そしてその恩を返す為に、今或は陣馬のために動かねばならない。

そう感じた或は、気を取り直してひたすら作業に没頭する。これを早く終わらせて各チームの話し合いに参加しなければならぬ。プライベートルームのクローゼットの中に金庫はあった。金庫を開け中に資料を詰め込んでいく。金庫もそここの大きさで、今見えてる分の書類を入れるのは容易いだろう。そしてざっと資料に目を通した感じ、ほとんどが中央区や政府、その周囲についての報告書のようだ。中には数年前の報告書もある。司から「アンチ異能街」に陣馬が属していたという話を聞いた時から勘付いてはいたが、やはり陣馬にも反政府の意思があったのだろう。

或は、ひたすら作業に徹した。

それから十分ほど。室内にあった書類は全て金庫に入れ金庫もロック。紙一枚残してないかを確認し、部屋を出る。事務所の戸締りをし、指定された場所に向かおうとしたその時、今まで窓からしか見ることが出来なかつた景色が眼前に飛び込んできた。

それは、いつもの異能街ではなかった。まるで戦争終結後のように建物は破壊され、通っていた道も重機が通った跡がついている。まるで別世界に来たかのような感覚に襲われた。

「ひとまず……アジトに」

感傷に浸っている余裕はない。未だ建物を取り壊している重機を横目で流しながら、或はただひたすら走った。

「はあっ……はあっ……」

そう遠くない場所にあるバッドのアジト。アジトは以前よりも土埃に塗れ、所々壊れそうになっただけはいるが建物自体は完全に取り壊されているわけではないようだ。だが外からで

もわかる異様な静けさに、違和感を覚える。

「この中に……」

或は臆することなく中に入っていく。だが中には誰もいない。

「ここで、合ってるよな……」

中に進んでいくと、どこからか話し声が聞こえてくる。耳を澄ましてその声のする方に近づいていくと、なんと地下からだった。

そして丁度真下から声が聞こえる所まで来ると、そこには地下室の入り口があった。それは扉式になっており、鉄でできた頑丈な扉だ。取っ手部分を引き上げると、金属の軋む音と共に階段が現れる。階段は扉よりも大きく、中は相当広いと考えられる。まるで地下シェルターのようなのだ。

「誰だ！」

開けたことで音が聞こえたのか、中から怒気と警戒を含んだ声が聞こえてきた。階段を降りていくと、とても広い空間に出た。そこにはたくさんの人が。

「或くん!?　なんでここに!?!」

「鈴原或！」

その人混みの中には茉奈や司(ルビ・つかさ)、義乃、嶺雅の姿があった。

「茉奈！　司！」

「無事だったんだね！　良かったあ……」

茉奈は或に近づいて手を握る。その手はとても冷たく、震えていた。

「鈴原。なんでお前がここに？」

全員からの視線が一気に集まる。広い空間の真ん中に大きなテーブル。恐らくここにいるのはオウル、バッド、**戌舞(ルビ・いぬまい)**格闘倶楽部の残ったメンバーだろう。各リーダーが席に座り、その後ろに他のメンバーが並ぶ形で立っている。見渡す限りざっと二十人。かなり少ない。

「陣馬さんからの指示でここ来るようになって。そして集まったリーダーたちの話し合いや結果を報告してくれてことでここにきたんだ」

「なるほど……。今丁度、我々も今後について話をする所だ」

茉奈の隣にいる屈強な男性が或に話しかける。実際に会うのは初めてだが、見たのは初めてではない。

「俺は戌舞格闘倶楽部のリーダー、戌舞樂兜だ。妹から話は聞いている。陣馬さんのところで働いてるそうだな。鈴原或君」

樂兜は或に近づき握手をする。

「鈴原或です。できればもう少し良い状況下でお会いしたかったですね」

「ふっ、そうだな。では話し合いを始めようか。まずは今後について」

樂兜が再びテーブルに着く。その近くで、或は立ったまま話を傍聴する。

「私たちは……正直中央区に従う気はありません。ですが……このままではいずれ」

「……そうだな。今やどのチームも抗う力なんて残ってない。抗っても潰されるだけだと思う。だがここで折れては相手の思う壺だ」

「決まってるんだろ。中央区を、政府を潰すまでだ」

トップ三人の話し合い全員抗う気持ちは同じみたいだが、やはり表情が曇っている。嶺雅も口では言うものの、以前のような覇気はなくなっている。

「……」

沈黙が走る。リーダー三人は懸命に頭を回転させるも、やはり打開策は出てこない。

「じゃあ」

沈黙を破ったのはどのリーダーでもなく、或だった。

「今、ここにいる人たち全員で手を組む……っていうのはどうですか」

その言葉に、リーダー以外のメンバーはざわめき出す。だがリーダー三人は表情一つ変えず考えていた。

「お前、自分が何言ってるのか解ってるか？」

嶺雅が或に厳しい目線を向ける。他二人や茉奈、司も鋭い目つきになっている。

「俺はこの前異能街にきたばかりの無能力者で、チーム間の事情なんてわかりません。ですが今それを持ち込んで対立したままなら、それこそ相手の思う壺です。だから今、今だけでも協力する方が得策だと思いませんか？ 俺からみれば、このメンバーなら中央区くらい倒せると思ってます」

その言葉に、リーダーの後ろに控えている各メンバーはざわめきだした。

「俺たちが……協力なんてできるのか？」

「さすがにそれは……」

或は、ざわめきを制止するように続ける。

「ここで反撃しなければ、ただ淘汰(ルビ・とうた)されるだけです。この街を、自分たちの居場所を守りたいなら、自分たちが変わるしかないでしょう？」

まごう事なく心からの本心を伝える或に、リーダー三人の心は打たれた。

「……ふっ。自分が変わるしかない、か。……いい話じゃないか」

「……ええ。私も、良いと思います」

何か吹っ切れたように樂兜と義乃は賛同した。後ろに控えるメンバーは、再びざわめいてしまう。やはり他チームと協力するのは覚悟がいるのか。

「どうだ、嶺雅」

やはり嶺雅はすぐ良い顔をしなかった。この中で一番協力と縁遠い嶺雅だが、今回ばかりは自分の置かれている身を理解しているようだ。

「……わーっつたよ。今回だけお前らに協力してやる。ただ、足手まといになるんじゃないか。一人でそんな奴がいたら俺が殺す」

リーダー三人が承諾。今ここに反逆者たちの同盟が結成された。三人は立ち上がる。

「鈴原さん。このことを陣馬さんに知らせてください。早いほうがいいでしょう」

「わかりました」

義乃からの指示で、或は携帯を取り出し陣馬に電話をかける。

『おう』

「もしもし。鈴原です」

『話し合いは終わったのか？』

「はい。その結果をお伝えしよう」と

『そうか。そこに全員いるんだろ？ スピーカーにして全員に聞かせてやれ』

或はスピーカーのボタンを押し、陣馬との通話を全体に聞こえるようにする。

『あー、聞こえてるか』

「ええ、大丈夫です」

『まずは結論から教えてくれ。お前らが出した答えは？』

「戎舞格闘倶楽部、オウル、バッドの残ったメンバーで手を組むことにしました。今だけの即席チームではありませんが……」

樂兜が代表して意を伝える。すると陣馬は少し笑いながら続けた。

『だと思っただぜ。即席でもなんでもいい。今はとりあえず頭数が欲しいからな。……つと、こつちも時間がない。これからの段取りを伝える。お前ら全員よく聞いておけ』

陣馬の声のトーンが下がり、場の雰囲気が一気に変わる。

『改めて、俺らの敵は中央区と政府だ。その中でも神園源氏(ルビ・げんじ)と神園統祇、恐らく今回の選別の件で中心になっているのはこの二人。先の会見で『政府に協力してもらう』と言っていたことから首謀者は統祇だ。アイツがアメリカに復讐を誓っているのは噂でお前らも知ってると思う。だからこそその選別だろう。そこで統祇、ないしは源氏の悪事を世にバラすことができれば今の状況は一転すると見ている』

政府と中央区が手を結んでいたとしても、両トップのこの二人を倒せば計画は止まる。それを止める為に陣馬やこのチームが動き出すのだ。

『大きく動くのは明日だ。このタイミングに今までの布石全部をぶつける。だからお前らも明日に動いて欲しい。場所は中央区にあるセントラルビル。ここを一気に叩く』

セントラルビル。恐らく或は何度も見てきたあの高いビルだ。

「叩くのはいいけどよ、その布石ってのはなんなんだ」

嶺雅が聞くと、それも説明する予定だったようですぐに返ってきた。

『俺の協力者たちが今まで集めた政府や中央区の汚職や癒着の証拠だ。他にも様々あるが、今まで掴んできた物を全部やつらにぶつける。だがそれでおさまると思えねえ。最悪能力戦なることも考えられる。そのためにお前らにはセントラルビルで暴れてもらう』

「そんなことをして大丈夫なのですか……？」

『大丈夫、とは言い切れないな。この作戦が成功すれば悪事をバラして中央区と政府は崩壊。だが上手く行かず途中断念した場合、神園を捕らえられず悪事もバラせない。おまけにお前らは政府に楯突いた悪者だ。居場所なんてなくなるだろうよ』

これは、政府と反逆チームの存続をかけた戦いだ。どちらかが崩れれば存続は不可能。この戦いに異能街の未来がかかっているととっても過言ではない。それほど重要な戦いなのだ。

『だから腹を括(ルビ・くく)れ。チームとしての意地を今、見せろ』

陣馬の言葉に、この場にいる全員が息を飲んだ。

「今更臆することは何もない。違うか」

「そうですね。戦う覚悟、このチームを守る覚悟なら、とっくの昔から持ってます」

「誰がきてもなぎ倒す。それだけだろ」

リーダー三人の強き言葉に、メンバー全員は雄叫びを上げた。

『鈴原』

ふいに名前を呼ばれ、スピーカーをオフにして電話を耳に当てる。

「はい」

『お前は当日、俺と一緒に行動する。二日後、事務所一度戻るからよ』

「わかりました」

そういうと陣馬との通話は切れてしまった。電話を終えた或に、茉奈と司が歩み寄ってきた。

「お前、何気に大胆だよな」

司がそう言うと、茉奈もその隣で頷いていた。

「何が？」

「ここにいる人間、特にリーダーたちはプライドも高いし誇りもある。そいつら相手に凄むとは……見ててヒヤヒヤしたぜ」

「手を組むなんて言った時はホントにどうなるかと思ったよ……」

二人はほっと肩を撫でおろす。

「あれは全部真実だし、ここで引き下がっても意味ないからな。それに二人も巻き込んだ。すまなかった」

或は二人に頭を下げる。

「気にするな。お前が言わなくてもこうなっていたら。それにお前が言ってくれたからこそ士気が高まっている。寧ろ感謝してくらいだぜ」

司が或の肩を叩く。その言葉に、或はほっとした。

「……これが終わったら、今度は三人で集まりたいね」

「だな。ちゃんと生きてられれば、だけどな」

「もー、司はすぐそういうこと言う」

司と茉奈の日常的なやり取りにほっとする或。この三人で集まったのは初めてだが、同年ということもあり、打ち解けるのは早い。

「それにゆっくり話す機会も欲しいしな。茉奈の言う通り、この総合が終わったら、な」

「ま、それ自体には賛成だ。だからまあ、互いに死ぬんじゃねえぞ」

司が拳を出しながらにと笑みを浮かべる。或と茉奈は、そこに自分の拳を突き出した。

「おうよ」

「うん！」

或は零奈を探すため、司と茉莉は自分たちのチームを守るため。己が目的を達成するためにそれぞれの道へと着いた。

五章 反逆

翌日。或(ルビ・ある)はふと目を覚ました。時刻は朝八時。いつもよりもスッキリとした目覚めだ。といっても仮眠程度しか寝ておらず睡眠時間は三時間もない。だが今日は作戦開始の日。或の心はなぜか落ち着いていた。

「目え覚めたか」

奥のデスクから聞こえた声で、寝ぼけた意識がはっきりとする。

「陣馬(ルビ・じんば)さん！」

何食わぬ顔でデスクに座る陣馬に、或は飛び起きて近づいた。

「いつの間に帰ってきてたんですか！」

「ついさっきな。それより今日はいよいよ中央区に殴り込みに行く日だ。覚悟はできてるな？」

異能街に来て数週間、色々な事があった。まさか零奈を探しに来ただけなのにこんな大事に出くわしてしまうとは。だが或はもう覚悟を決めている。

「……はい」

「よし」

二人は頷く既に準備は万端。或も仮眠をとる前に準備を終わらせていて、いつでも出れる状態だ。

「行くぞ」

二人は、事務所を出た。

「ちなみに今日の段取りって」

「ああ。俺たちは少し後に行く。先に**樂兜(ルビ・がくと)**たち反逆軍がビル内で騒ぎを起す。それに乗じて俺たちも最上階に行って**統祇(ルビ・とうぎ)**と会う。昨日も言った通り最悪統祇と戦う事になるかもしれない。そうなったら腹括って戦うしかないな」

「ちなみに**神園(ルビ・かみぞの)**統祇の能力って……」

「『全能』だ。記憶した能力を最大出力で使える異能力の中でも間違いなくトップだ」

或は異能力の詳細を聞いた瞬間、瞬時にひらめいた。陣馬もそれに気づいたのか口角をニヤツとあげる。

「それに奴は**嶺雅(ルビ・りょうが)**のように戦闘狂タイプに近い。俺らで太刀打ちできなく

てもこつちには樂兜や義乃、嶺雅がいる。大丈夫だろ。統祇を倒せばミッションはクリアだな。悪事バラして政府諸共壊滅させてやる」

聞きながら歩いていくと、中央区に入る。すぐ目の前にはセントラルビルが。各々近くに反逆軍の**面子(ルビ・めんつ)**が集まっていた。

「ようお前ら。準備はできてるか」

その声に気づいた面々は陣馬を取り囲むよう集まる。

「自分から戦いを仕掛けるのは気乗りしないが……やむをえまい」

そういうのは胴着姿の樂兜だ。戌舞格闘倶楽部はもとより中立の立場を重んじるチームだ。自分から仕掛けるのは気が向かないようだ。

「こつちも人数はあまり多くないな」

「動けるやつらはこれだけだ。いるだけいいんじゃないか」

陣馬は、全員の顔を見渡す。

「お前ら、覚悟はできたな。段取りは送った通りだ。お前らはひたすら暴れるだけでいい。リーダー三人はある程度したら最上階に来いよ」

三人は頷く。いよいよ、反逆が始まろうとしていた。

「じゃ、いっちょ行くか」

陣馬の言葉を合図に、各チームの部下たちが中に入っていく。中からは急な**喧騒(ルビ・けそう)**が響きはじめ、肥大化していく。それを見計らったリーダー三人と、陣馬、或も中に入っていく。

「じゃあ、またあとでな」

入り口に入ると、さっそく三人と二人に分かれる。或と陣馬が目指すのは最上階、エレベーターは職員用の物しかなく、階段で上がるしかない。陣馬と或はさっさと移動し階段を昇っていく。

「大丈夫ですかね。いくら急襲といっても相手にも異能力者はいるでしょうし」

「そのために種も撒いておいた。俺の協力者たちがなんとかしてくれるさ」

すると突然、階段にも立ち込めるほどの霧が建物のあちこちを包み込んだ。

「これは……?」

「能力を見るのは初めてだったな。これはスモーカーズの部下が持つ発煙系の能力だよ」

「スモーカーズ!? それに協力者って……。スモーカーズは中央区側に付いたはずじゃないんですか!？」

先の会見にて、スモーカーズが中央区に協力したとの情報が流れていたはずだ。

「あれは俺が仕込んでおいたものだ。**霧(ルビ・きり)**は聡明な奴だからな。すぐに行動に移してくれたよ。それにやつらの懐に霧が入ってくれたおかげで計画、汚職、癒着の証拠が揃ったってわけだ」

恐らくこれは陣馬が帰ってこなかった期間で準備したものだろう。

「陣馬さん……流石です」

「まだまだここからさ。まあ潜ませている協力者が……もう一人は最上階前でスタンバイしてもらってる。ひとまずそこにいこう」

二人は高く長い階段をひたすら歩いていった。

「オラオラッ！ かかってこいよ！」

建物内に入った面々は、思い思いに暴れていた。一フロア制圧したら上へ、を繰り返して今は四階。陣馬の見立てだと人が入っているのは七階までとのこと。

「嶺雅、義乃（ルビ・よしの）！ お前らは上のフロアにいけ！ 俺と茉奈（ルビ・まな）でここを止める！」

樂兜（ルビ・がくと）は二人に指示する。

「指図すんじゃねえ！」

とは言いつつも嶺雅はすぐに上に上がっていった。ここはどう戦おうと効率重視で行くほうがいいと判断した樂兜は、主力を二人ずつに分けて制圧していく作戦をとった。

「茉奈、いけるか」

「もっちろん！」

「気絶程度でいいだろう。行くぞ」

「あいあい！」

辺りは煙で視界不良。だがそんなハンデを諸共せず樂兜と茉奈は敵に近づいていく。そのままみぞおち深くに拳を一撃。あっという間に敵は倒れていく。

「ある程度倒したら上に行くぞ」

「あの二人は大丈夫かな……ふっ！」

完全に煙の中からの攻撃だが、気配を察知して茉奈は避ける。そのままバックキックで蹴りを入れる。樂兜は一人の身体を掴み投げ飛ばす。その先にいた何人かの局員を巻き込みながら同時に倒れていく。このフロアは、戌舞兄妹の独壇場になっていった。

上のフロア、主力は嶺雅と義乃。相まみえないこの二人だが、肩を並べている。

「他の方たちが来るまで時間を稼ぎます！」

「稼ぐ必要なんてねえ、倒しゃいいだろうがよ！」

義乃は模造刀を構え、嶺雅は小型ナイフを構える。他の部下たちは未だ下のフロアにいて、このフロアは二人だけだ。

「……まさかあなたと肩を並べて戦う事になるとは思いませんでした」

「お前との戦いも決着付いてねえしなあ。これが終わったら決着付けようぜ」

「ふふっ。減らず口を。あなたになんて負けませんよ。……はあっ！」

以前抗争が起きて争っていた二人だがなんの因果か今度は肩を並べて戦っている。二人は互いの武器を使って時間を稼ぎつつ制圧していった。

「早く上に行きましょう。彼らと神園の戦闘が始まってしまいう前に」

「だから指図すんなんて言っただろうがっ！」

力強くアッパーを繰り出す嶺雅。格闘戦なら茉奈や樂兜には劣るがそれなりの力を持っている。下の反逆軍は、着々と上に上がっていた。

※※※

着々と階段を上がっていた陣馬と或は、一度階段を出て倉庫のような部屋に出た。

「さて、この上が最上階なわけだが……お前に合わせたい奴がいる。出てこいよ」

「さっき言ってた協力者の人……え」

陣馬が話しかけると、扉の影から人が一人、入ってきた。その人物とは。

「や。久しぶりだね。或」

「……零奈(ルビ・れいな)!!」

或の目の前に立ったのは、紛れもなく或が探していた零奈だった。

「お前……っ！」

いきなりの演出に驚きが隠せない或は、零奈の前で固まってしまっている。零奈は少し気恥ずかしさが残るのか、頬を赤く染め目を合わせられずいた。

「やー、ごめんね。急にいなくなったりして。ちよつと色々あって……」

無理に気さくな振りして話す零奈に、或は抱き着いた。

「ちよつ、或!? どうしたの!?!」

零奈は頬どころか顔全体を赤く染め慌てふためいてしまう。

「……会いたかった。ずっと」

零奈の肩に顔を埋め、少し涙ぐんだ声で或は漏らした。そんな或の頭を撫でながら、零奈は優しい笑みを浮かべる。

「……うん。私もだよ」

まさに感動の再会。この瞬間のために或は頑張ってきたのだ。二人は、しばらく抱き合っていた。

「おいおい、惚気は後にしろよ。まだ何も終わっちゃいないんだぜ」

「今までどこに……連絡くらいしろよ……」

「えつとー……」

或は聞きたいことが山ほどあるのだろう。何から話していいのかわからないようでしどろもどろしていた。

「今まで私は中央区の局員として潜入していたの。理由は手紙にも書いた通り両親の死の真相を知るため。それに足のつく連絡は極力避けなきゃ中央区の方にもバレるかもしれないから、或も含めおじいちゃんやおばあちゃんにも連絡取れてないんだ。ほんとにごめんね」

零奈が中央区にいたこと、音信不通だったことを零奈は、申し訳なさそうな顔をする。或もまだ全てを知れたわけではないが、今の情報だけでも頭がパンクしそうだ。

「真相を調べて、まあその道中でも色々合ったんだけど、陣馬さんに声をかけられたんだ。そこで反逆軍の存在を知って、今回の騒動に参加したの。両親の死は政府に意図的に犯されたもので、政府が隠蔽してることも知った。そしてその無念を晴らすために、陣馬さんに協力してるの」

「まあそういうこったな。コイツの旧性が『風靡(ルビ・ふうび)』だと知ったときは驚いたぜ。両親は過去に俺とアンチ異能街で一緒だったんだ。ちょうど両親にも借りがあったからな。協力を依頼するに値する人間だった」

やはり裏でしっかり合っていた二人。零奈も、陣馬も、見えないところで頑張っていたのだ。

「陣馬さん……ありがとうございますっ!」

「これでお前からの依頼はクリアだな。だが感動の再会の後で悪いが時間も無い。そろそろ上に行くぞ」

陣馬は二人より先に進む。二人も後についていき階段を昇る。

「零奈……その……俺……」

何か言いたそうで言えない或。そんな或に零奈は優しく声をかけた。

「積もる話はまた後でゆっくり、ね?　ひとまず会えてよかったよ」

優しく笑いかける零奈。その笑顔を見た或の目尻には、涙が浮かんでいた。

「も〜、泣きすぎ!　ここにきてから涙もろくなっちゃったのかな?」

涙を拭き、二人も陣馬の跡を追う。階段を昇りきると、大きく豪勢な扉が目の前に現れた。

陣馬は扉に近づき一切躊躇うことなく扉を開ける。

「よう。下が騒がしいってのに随分と余裕なんだな」

陣馬に続き二人も室内に入る。室内は壁がガラス張りになっていて、異能街を一望できる。

中にいた人物はこちらには一切視線をやらず外を眺めていた。

「やはり首謀者はあなたでしたか。探偵さん」

「大人しく降伏しろ。出来るなら俺も手荒な真似はしたくない」

「手荒な真似、ねえ。あなた方三人でどうにかなる相手ではないですよ。三人中二人が無能力者で、唯一の能力者も戦闘向きではない。……まったく、がっかりですよ。もっと楽しめると思っただのに」

「まあ安心しろよ。能力戦なら下のやつらが合流した後でたっぷりとできるさ。だから俺たちは前座。話し合いがしたいだけだ」

陣馬は堂々と来客用であろうソファに座る。その姿を見てようやくこちら向いた統祇。テレビで見た顔そのままだ。陣馬の対面に座るのかと思いきや真ん中の恐らく仕事用のデスクに座る。

「話し合い、ですか。何を話し合うというのです?」

「まず確認したいことがあります。あなたは私の両親……風靡誠(ルビ・まこと)と風靡凧(ルビ・なぎ)を殺したんですか……?」

零奈は少し震えた声で統祇に聞く。すると統祇はふっと笑みを溢した。

「あなたは自分で手で調べたのでしょうか？ それなら私に聞くまでも無く答えはわかっているはずですが」

「ッ！ このッ!!」

敢えて挑発する様零奈をおちよくる。激昂し、統祇に近づこうとする零奈を止めるよう陣馬が割って入る。

「俺のことは知ってるくらいいだ。風靡の二人のことも知ってて当然だ。あの二人はアンチ異能街の筆頭だったからな」

アンチ異能街の筆頭、**即(ルビ・すなわ)**ちリーダーだ。或は依然陣馬と零奈の両親はアンチ異能街での知り合い、としか聞いていなかった。それに**司(ルビ・つかさ)**から『アンチ異能街の面々が段々と姿を消し、変わり果てた姿で見つかった。更にその中に頭もいて、頭がいなくなったことよってアンチ異能街は霧散した』と聞いた。その頭が、零奈の両親だったということになる。つまり零奈の両親は、政府絡みで殺されたことが確定だったのだ。

「あなたは中々しぶとかった。尻尾すら見せず逃げ回り拳句の果てには異能街で探偵事務所なんて開く始末。付き合い切れませんでしたよ」

「あたりめーだ。お前らは政府と組んでアメリカへの復讐を企んでいるのだろうが、お前らの傲慢にこの街の人間は付き合う気はねーよ」

言葉を飛ばし合う二人。二人には昔からの因縁のようなものがあるのだろうか。

「いいえ、付き合ってもらいますよ。力づくでもねじ伏せて……ね」

突如統祇の雰囲気が変わる。デスクから立ち上がりスーツを脱ぐ。今まさに肉弾戦が始まろうとしていた。

「或！ 気を付けて！」

何も動作が無かったが突如統祇の姿が消えた。そして現れたと思ったら或の眼前。警戒はしてたものの、いきなりこのことに反応できなかった。或の腹部から全身にかけて鋭い痛みが走る。

「がはっ……!!」

力無く倒れる或を見下ろすと、またすぐに消える。すると次に現れたのは零奈の背後だった。背後から零奈の後頭部に掌を出す。すると掌から衝撃波のようなものが出た。これも異能力だろうか。

「きゃっ……!!」

衝撃に耐えきれず零奈も倒れ込む。

「この程度ですか。こんな人たちを連れて来るなんてあなたの目も濁りましたねえ」

「オイオイ、言ったら。俺らは前座だって。戦いならコイツらが適任だ」

すると、部屋の中に先程建物中にも広がったスモークが放たれる。急激に視界が奪われる中、扉の方から数名の影が飛び出す。その正体は下のフロアから上がったきた樂兜、茉奈、義乃、嶺雅だった。

「ふんっ！」

「っらあ！」

樂兜と嶺雅が統祇に襲い掛かる。だが見事にそれを受け流すと距離をとった。

「或くん、大丈夫!?」

「零奈さんも、大丈夫ですか！」

茉奈が或の肩を、義乃が零奈の肩を支える。かろうじて二人は立ち上がると、次第に自立した。

「なんと……もう到着とは。早いですね」

「リーダーなめんじゃねえよっ！」

嶺雅が連撃を繰り返すも、ことごとく避けられる。

「何たる豪華なメンバーでしょうか……。あなたたちも私の復讐に賛同してくれたら、どれほどよかったですか」

「それはない。復讐などに加担するほど、俺らは腐ってない」

一度距離をとった統祇。こちらは陣馬含めて七人。数の利はこちらにあるはずなのだが、それを全く感じさせない統祇の気迫に、全員気を抜けない。

「先に言っておくと、私は無能力者に興味はありません。その少年と探偵には実際の所興味はないんですよ。それにその弱い能力を持った女性も」

統祇の目は、完全に能力者たちに向いている。

「あなたたちの能力、貫ってあげますよ」

「油断してはいけませんよっ！」

四人は臨戦態勢に入った。統祇はまたも素早い動きで義乃に近づいた。義乃は模造刀で応戦するが、素早い動きについていけない。

「はあああっ！」

速さに**翻弄(ルビ・ほんろう)**される義乃のカバーに入るよう、茉奈が蹴りを入れる。すると蹴りは見事統祇にヒットした。

「流石は最強選手の妹。良い動体視力です」

「茉奈、合わせられるか」

「もちろん！」

そこに樂兜も加わり、二対一で詰めていく。傍から見ても、それは圧巻ともいえるコンビネーションだ。流石兄妹か。

樂兜が攻撃をし、その隙を補うように茉奈がカバーに入る。茉奈が攻撃するときは今度は樂兜がカバーに入る。総合格闘技日本一と、その妹のコンビネーション。

「良いですねえ、能力を使ってもいいんですよ？」

今のところ、二人は能力を使っていない。肉弾戦になれば統祇も二人に並ぶ程の受け流しや受けをしている。

「どうする？ お兄ちゃん」

「ここで手を抜く意味もない。全開で行く」

すると突然、樂兜からとてつもない覇気が出た。

「陣馬さん、二人の能力ってなんなんですか？」

「ああ、よく見ておけ。樂兜の能力は『身体強化』名の通り身体能力を数段階引き上げる樂兜との相性抜群の能力だ。茉奈は『閃光』任意の場所から光を発することが出来る。こちらは一見地味ではあるが隙を作れる能力だ」

すると、樂兜の方から動き出した。その動きは、先程にも比べ物にならないほどだ。

「あはっ、いいですねえ。これでこそ倒しがいがあるというもの！」

すると統祇も異能力を使った。統祇の異能力は『全能』記憶した能力すべてを使えるというもの。だからこれは統祇の能力であって、統祇自身の能力ではないのだ。

「うぐっ……これは……」

樂兜の身体中に黒い液体のようなものがまとわりつく。

「これは体力は吸い取るものです。あなたはちょっと強すぎますからね」

無数の黒い液体を纏いながら、それでも樂兜は立ち上がった。

「うおおお!!」

黒い液体がついたまま攻撃を繰り返す。それは予想していなかったようで、統祇は攻撃を喰らってしまふ。

「ぐっ……これでもまだ動けるとは……」

「お兄ちゃん！一旦引いて！」

茉奈が叫ぶと、統祇の顔付近に強烈な光が発生した目が眩んだ統祇にできた隙を、樂兜は見逃さなかった。

「助かった」

距離を取り、身体に付いた液体を取る。まるでそれはスライムのような粘着質のものだった。

「休んでる暇ねえぞオラッ！」

視界が奪われている状態の統祇に近づき、ナイフを振る。だが目が見えていない状態にもかかわらず統祇は全て躲す。

「ふっ！」

更に統祇の後ろから、義乃が模造刀で突く。更に異能力を使っているのか統祇は明らかに足取りが重くなっていた。

「今が一番重い状態です！今のうちに！」

義乃の合図を皮切りに、全員で攻撃に掛かる。流星に全ては受けきれず何発かダメージが入った。

「このまま叩く！」

樂兜の一言で全員一斉に攻撃に掛かった。それに反撃する統祇。一進一退の攻防を、陣馬と或、零奈は見ている事しかできなかった。

戦闘から十五分ほど、全員もう満身創痍だった。ダメージと疲労でまともに動いていない。

「鈴原」

「わかってます」

ただ見る事しかできない二人だが、作戦もあった。その機会を窺っているわけだが、中々見せてくれない。

「はあっ……はあっ……これで、終わりです」

統祇は、再び素早い動きを繰り返す。最後にとまったのは、嶺雅の背後だった。

「くたばれ」

統祇の手が触れた瞬間、嶺雅を中心に地面にヒビが入り嶺雅が膝をつく。この能力は恐らく義乃の『重力操作』だ。

「くっそが……っ！」

攻撃を仕掛けるべく、全員が体制を整える。だが統祇はここで更に能力を使う。

「あなたの身体強化、貰いましたよ……」

動きが更に俊敏になる。傍から見ればもうどちらが優勢かは火を見るよりも明らかだ。

「楽しかったですよ……ふっ」

倒れた面々を見下すように立つが、統祇も立つのがやつとのもので、足元がおぼつかない。そこが狙い目だった。

「今だ！ 鈴原！」

「こっちだこの野郎！」

その声に統祇は反応して振り向く。そこには、拳を握り締めた或が、統祇に向かって殴りかかるうとしていた。

「ぐっ……」

統祇はその拳を顔に受け、表情を苦痛で歪ませる。立て直す隙を与えず更にもう一発。

「無能力者があああ!!」

直後、或の身体中に衝撃が走る。それは統祇から繰り出される身体強化を乗せた怒りの攻撃だった。

「或っ！」

身体に至る所を殴られ、一気にポロポロになる。倒れそうになるが、何とか持ちこたえる。

「負けねえよ俺は……ああああ!!」

気合だけで或は統祇に一発殴り返す。それと同時に或の顔にも拳が入る。限界を越した状態で、最後一発が同時に顔に入る。だが倒れたのは、統祇だった。

「はあっ……はあっ……」

殴られた統祇は、地面に突っ伏したまま立ち上がることが出来ない。その姿を見下す或。だが或もフラフラだ。

今、或の攻撃がまともに入ったのは、まぐれではない。或はずっとこの機会を窺っていた

のだ。このビルに向かう途中、統祇の能力について説明を受けた時に、陣馬と或は確信していたのだ。『キーになるのは、無能力者の或だ』と。嶺雅のように戦闘に意識を向けすぎると、或の存在を忘れてしまうだろうと読んでいた。それに統祇も人間だ、疲れることもあればダメージの蓄積もある。思わぬ角度からの攻撃はトドメになりうると確信していたのだ。統祇は、倒れたまま動かない。恐らく気絶したのだろう。室内では**疲弊(ルビ・ひへい)**しきった面々がその場に座り込んだ。

或だけは立ったまま、右手拳を上に掲げる。

「いよっしゃああ!!」

或の雄叫びが室内に、建物中に響き渡った。或は手を下ろすと床に倒れ込む。

「おら、帰んぞ」

或に手を差し伸べたのは、にと笑った陣馬だった。陣馬の手を取り、気力だけで立ち上がる。零奈も或の身体を支え、陣馬と零奈に挟まれながら**朦朧(ルビ・もうろう)**する意識の中、部屋を後にした。

「俺らも行くか」

「お兄ちゃん……おんぶして……」

疲れ切った戌舞兄妹。茉奈に至っては倒れ込んで立ち上がることすらままならない。

「立てますか？」

「ああ……わりいな」

義乃は嶺雅に手を差し伸べる。この四人と或、零奈、陣馬の力をもつてしてようやく勝ったのだ。改めて神園統祇という男は化け物だった。

一度全員外に出て、再び結集する。ポロポロのリーダーたち、それなりに疲弊した部下。今回の作戦は成功に終わった。

「ご苦労だった。目標は撃破したし、アイツらの裏でやったことも今俺の協力者たちが拡散してくれている。あとは時間が解決するだろう」

陣馬が最後の説明をしている時、零奈の肩を借りていた或が目を覚ました。

「んっ……」

「或、起きたね。改めてお疲れ様。今回の作戦は成功だって陣馬さんが言ってたよ」

或を座らせ、その隣に零奈も座る。

「そっか……良かった」

或は周りを見渡す。大体のメンバーは座り込んでいて、ビルの周りには通常都市の警察や異能街の人間が集まっていた。

「ほんとに頑張ったね」

零奈は或の頭を撫でる。或は、何か思い出したかのように袖をまくった。

「そうだ……零奈、これ……」

或は、手首に巻いていたRのネックレスを解いて零奈に渡す。

「保管しててっていったのはお前だぜ。……返すよ」

「やっぱり付けてくれたんだね。ありがとう」

零奈は、再びネックレスを首に付ける。

「ずっと、謝りたかった。あの日喧嘩したこと、つまらない意地を張って謝れなかったこと……本当にごめん」

或は、ずっと言えなかった思いを口にした。

「私の方こそ、ごめん。ついうっかりとは言え、あんなこと言わなければ喧嘩になんてならなかったからさ」

二人は、ずっと伝えたかったことを伝えあい満足げの表情だった。

「それと、もうひとつ……」

或は零奈に再び向き合う。或は顔を赤らめ、けれど覚悟を決めた顔で。

「俺も、お前のことが好きだよ。これも伝えたかった」

受け取った手紙に書いてあった『私の大好きな幼馴染へ』という言葉、或は忘れていなかった。零奈に会ったら謝って、これを伝えるんだとずっと考えていたのだ。

「……もう」

傷だらけの顔を赤く染め、零奈は或に抱き着いた。

「私も、大好きっ!」

いつか懐かしいこの会話。もう二度とできないかと思っていたが、ついにそれが叶った。見事政府にも勝ち、零奈も見つけ出した。或は、全ての目的を達成した。

エピローグ

あれから数か月後、様々な変化があった。陣馬(ルビ・じんば)と陣馬の協力者がリークした情報によって、中央区と政府が共謀した裏工作は公(ルビ・おおやけ)になった。それにより中央区の関連人物、日本政府の一部と首相は逮捕された。首相を失った日本だが、今の所副首相が日本の首相代理になっており、中央区のトップには陣馬がついた。他からの圧倒的指示で**抜擢(ルビ・ぼつてき)**されたのだ。

だが激務の中、陣馬はしっかりと中央区を再建しつつあった。まずは異能街と通常都市の差別を無くすという事で異能街と通常都市を遮断していた高い壁は無くなった。更にチームという概念も捨て今後は差別が無く、自由な場所になるよう尽力している。

政策については、異能力者でも通常都市に住めるよう動いているそうだ。おかげで今、或や零奈はいったん地元に戻ることができた。

一方の**或(ルビ・ある)**にも変化はあった。まずは**零奈(ルビ・れいな)**との交際開始。この事は周りも親も認知の上でだ。そしてもう一つ、何度か陣馬と連絡を取り合い、東京で会うことになったのだ。零奈もそれに呼ばれ、二人は今日、東京に来ていた。

「陣馬さんからの協力要請ってなんだろうね」

「さあ。でもまあ出来る範囲なら手伝わねえと」

「そいやさ、ふと気になったんだけど、零奈の異能力ってどんなやつなんだ？」

「統祇と戦った時、戦闘向きではないという理由から、統祇は興味を示さなかった。」

「私の能力は『認識歪曲』。対象の自分に向けての認識を変えるんだよ。ほら……こんなふう」

途端、零奈の事を見ていながら、或は誰を見ているのかわからなかった。感覚的には誰かほかの知らない人を見ているような感覚。

「ほっ、これが私の能力だよ」

「す、すごいな……。お、着いたな」

大道芸のような能力に或は驚いた。そしてそれと同時に仕事場に到着する。

陣馬の仕事場は、以前と変わらず探偵事務所であった場所。ここが馴染むからとここで中央区トップとしての仕事をしているようだ。

事務所につき、扉をノックする。

「空いてるぞ」

「こんにちは、お久しぶりです」

「おう」

中は昔と変わっておらず、或は懐かしい感じを覚える。

「それで、今日はどうしたんです？ 急に東京に來いだなんて」

「まあ座れや」

二人を来客用のテーブルに通しお茶を出す。

「実はな、俺の仕事が忙しすぎて身体がひとつじやたりねえんだ」

嫌な予感はしたが、或は何も言わない。

「そこでだ、お前らに俺の協力者になってもらいたい」

協力者。どこか懐かしい響きだが或は薄々その真意に気が付いていた。

「協力者って、何をすればいいんですか？」

零奈が聞くと、陣馬はにやりと不敵な笑みを浮かべる。

「お前らここで俺の雑用として働け」

これもまたいっぞや聞いたようなセリフだ。

「……いいですよ」

或は即答した。元よりどんな協力要請でも協力するつもりだった。というのも陣馬には数えきれない恩があるからだ。今度は或が、その恩を返す時だと思っていたのだ。

「私も、別に大丈夫！」

「そうか、ありがとな」

懐かしい会話に少し想い馳せる或。

「じゃあ零奈は書類仕事を手伝ってくれ。鈴原は雑用でトイレ掃除からな」

「わざわざ東京まで来てトイレ掃除とか……」

「ま、いいんじゃない？ 楽しそうだし！」

ウキウキで目を輝かせている零奈。或はこれからまたこの街で過ごすことができるのだ。前のような危険な目に遭うこともなく、個人的に目的もない。

「……そうかもな」

或は窓から外を見つめる。窓から見える空は、初めて東京に来たときと同じ雲一つなく、澄み渡った青空だった。